稲妻イレブン

七島　希意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
稲妻イレブン

【Ｎコード】
Ｎ０７６２Ｐ

【作者名】
七島　希意

【あらすじ】
イナズマイレブンオリジナル短編集！
終わりなしっ！たぶん。
暇だったのであらすじを丸々変えてみたりした。←どうでもいいよ。
イナイレが好きすぎて大変な作者が頑張って書いている小説。
気軽に読んでください。風丸多めかな？
小説の説明を一言でいうならば、

『常に金欠で選手に役にたったことのないマネージャーがボケてツッコんでときには恋愛し、イナイレキャラとともにこの小説を盛り上げていく！』

という小説でぃず！

リクエスト？ばっちこいっ！未来の奴？僕の手にかかればおいしく料理してやるＺＥっ☆

リクエストは暇人なんで
一週間程度いただければ
かけるかと…。

ってな。こんなテンションが高い奴ですが、イナイレのことになると真剣ですから（（キリッ

※この小説は皆さんの声で成り立ったりしちゃってます。頑張ってリクエスト考えちゃおうねっ☆

基本標準語を使ってるつもりですが、時々方言がでるかもなっ！

主人公紹介／主人公（前書き）

妹によってイナズマイレブン好きにされました。
ずっと観てたら愛着わいたよね。

主人公紹介／主人公

主人公：藍原　四季（しず）

これでなんで”しず”と読むかって？

ニックネームが”シーズン”だから！

なぜかマネージャー。

監督の好み。

だからかもしれない。

運動神経マイナスなんとか。

「運動させるな。怪我するぜぃっ！」

その他。色々。

あと、なんかわからんがいろんな選手と交流してる。

ギャグでは主にツッコミ。

いつでもどこでも金欠中。

だれでもいいからおごってください。

選手たちにおごらせようとするが、ほぼ失敗。

おごってもらおうと奮闘中。

「シーズンはツッコまない。シーズンはツッコまない。マネージャーが春夏秋冬そろっていてもツッコまない」

主人公紹介／主人公（後書き）

いい加減。
これからだよ。話はよう。

サッカーやろうぜ！／ギャグ／円堂（前書き）

かるーくだよ。
かるーく。

サッカーやろうぜ！／ギャグ／円堂

「おい！シーズン！」

嫌な予感しかしませんけど・・・

振り向かなきゃいけませんか？

「シーズン！」

うわー・・・呼んでるよ・・・

マネが選手をシカトなんて普通はないですよ。

わかってるけどなぁ。

「はい。キャプテンなんでしょーか？」

「サッカーやろうぜ！」

バカやろうっ！

私は運動音痴だよっ！

やめろー

相手いないからってやめろよー

いい迷惑。

「ごめーん。ちょっと用事が・・・」

な、なに?!

行く手を阻まれただとっ・・・畜生。

なんでマネージャーやってるか?

さーね。

事の成り行きってヤツだよね。うん。納得。

「サッカーやろうぜ!」

「うーん。じゃあ、アイスとこないだ見つけたかわいらしーストラップを買ってくれたら、い・・・・・どこいった?!おーい!キャプテン!どこだーい?」

その後、キャプテンがシーズンをサッカーに誘うことはあまりなくなったという。

サッカーやろうぜ！／ギャグ／円堂（後書き）

つまらん。泣きそう。

あ、リクエストとか・・・ないですよね！

あと、主人公の名前を自分の名前にしてこのキャラと甘い話を・・・ないですよね！

はい。はい。了解です。

マイナスイオン？／ギャグ／風丸

「シーズン。合宿所にドライヤーほしい」

「？」

廊下を歩いていた私に風丸が言ったわけだが。

「あるじゃん。合宿所に」

「違う。マイナスイオンが出るやつがいい」

うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？！

ま、、、マイナスイオン？！

私この方一度もドライヤー使ってて

あー、マイナスイオンでたらなー

って思ったことありませんけどっ？！

いまどきの子は、まったく・・・

「シーズン！この髪を保つの大変なんだよ。この苦労わかる？」

「知らんわッ！」

たしかにこのキューティクルを保つのは大変極まりない。

・・・と思う。

だが、しかし。苦労は知らん。知りたくない。

「毎日のトリートメントは大切だよ？毎晩しないと保てないよ？シーズンもしてるでしょ？トリートメント」

「してない」

キパッリだ。

トリートメントなんてリンスでいいじゃないか。

違いなんて知らんよっ！

意味わからんっ！

なんだこの敗北感は・・・・！
男に負けた！！

「だけどね？シーズン」

もう髪がどうたらかんたら言ってたら話が先に進まないとばかりに風丸が冷静になった。

うん。それ正しい。
わからんからな。

「優越があると思うんだ」

「優越？」

「そうだよ。風丸の優越だよ！！！」

「し、知らねー・・・」

ちなみに優越とは、中３の公民で習う”衆議院の優越”だ。

なんか、有利になんか進めるどーたらかーたら。

風丸の優越だと?!

自分でそんなの言うのどうなんだ。

「サッカーやってるのは後悔してない。だけどね?もともとは陸上部だったんだよ。そして、陸上で世界に行こうと思っていたわけなんだ。だけど、円堂の頑張りを見て助けたくなったんだよ。それは、自分でも良かったと思ってるし正しい選択だった。たぶん陸上やっていたらこんな感動を仲間と分かち合えなかった」

「うん。じゃあ、いいだろ」

話を打ち切りもう、行こうと思う。

つか、帰ろう。

ブツブツぶつぶつ・・・もうッ!

「そだ!もうすぐマネージャー会議が開かれるような・・・」

腕時計無いくせに腕を見た。

ふりだよ。ふり。

「あれ?シーズン。どこいくの?選手の話聞くのもマネージャーの仕事だよ」

「うん。だけど長・・・」

「ねえ？」

「いや・・・」

「ねえ？」

「・・・」

「ねえ？」

「あーっ！監督ぅ！」

「え？！」

ダッシュっ！

いねーよ。わるいな！

・・・っ！

バカはえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇええええええええええええええええ！

！！！！！！！！！！！

風かっ！！！！

逃げろっ！私ッ！

・・・。

マイナスイオン？／ギャグ／風丸（後書き）

ギャグむずかしー。

終わりがむずかしい。

リクエストを・・・ないですよねー

夜中の隙間風がウザイです／ギャグ／豪炎寺（前書き）

豪炎寺のイメージ破壊の原因になるかもです。

夜中の隙間風がウザイです／ギャグ／豪炎寺

びゅよよよよよーーーーーーーーーーーーー

うっせぇ。

隙間風マジうぜぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーー。

「眠れるか！ばっきゃろー！！！！！」

あ、隙間風に負けた。

「うぬーーーーー」

ただいま午前2時。

「このボロ合宿所がっ！！」

怒られそう。マジで。

大丈夫。監督のお気に入りだから。

びゅうううううううううーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「よし。だれか巻き添えに」

おい。選手。

マネージャーは選手を助けるヤツだと思ってるだろ。

ふふふ。残念。世の中そんな甘くない。甘くないんだよ。

邪魔するよ。

明日、６時から練習だけど邪魔するよ。

「レッツゴー」

廊下さむっ。

さー、えじきは誰かなー。だれかなー。

円堂。は却下。他のマネの視線が怖すぎ。

風丸。無理。優等生ちゃんだから。

よし！部屋が一番近い豪炎寺にしよう。

怖いけど私は知ってる。
あいつはロリコンなことを。
有名だよ。メンバーの中では。

まー、それは今どうでもいい。

お、もう、ついたぞ

「ごーえん・・・」

ばこぉぉぉぉ

ドア勢いよく開いた。

心臓バクバク。

ドアぐらい冷静に開け閉めしろよッ！！！

「なんだ。シーズン」

「ふぅ・・・あのなぁ！！！！！」

「そうか。用は特に無いか。それはなによりだ」

「おい！ちょ、ちょっ！まてやぁぁ！！」

注意。今、午前２時１０分。

「うるせぇ。お前はティラノサウルス並みにうるさいな」

なんでそこでティラノなんだ！？

いや、比較が桁違いでしょう！！

「行くぞ！」

もう、うるせぇから行こう。

「どこにだ！？古代にでも帰るのか？！」

「何故だッ！何故そうなった！！！！！」

「いや、ティラノだから」

「そうかー。私はティラノーーーーーーーーーーーーーーって
うおおぉーーーい！！違うじゃん！！ティラノ違うじゃん！」

「はぁ・・・眠い」

「お前がギャグ吹っかけてくるのが悪い！」

「で？」

「で？・・・あぁ。そうだった。すっかり忘れてた。ちょっと部屋
に来てくれ」

「なんで？」

「いや、行けばわかるのだが」

ここで言ったら全力でドアを閉められそうだ。

「嫌だ」

キッパリ断られたぁぁぁあああああああああああああああああ！
！！！

こんなにも騒いで！

いや、騒がせて！！！

なんでみんなが出てこないかって？

みんな巻き込まれるのが嫌なんだよ。

ふふふっ。

わかってるよ。

なぜなら私は・・・・・・・・・・トラブルメーカーだから！！！！

イナズマジャペンのトラブルメーカーだから！

「おねげーしますよ。妹さんだってお願いしてるって」

「なんだって・・・？」

「さーいこー！妹さんが大好きなお兄さんになるために！！」

「ラジャーーー！！」

ノったよ。この人。

うわっ☆豪炎寺って意外と単純☆

「これなんだが」

「うむ。隙間風か」

「どうみてもそうだ」

「どこだ？原因は」

「さぁ？だが、お母さんから送られてきた、

どう見ても企業の宣伝用だろこれ。

と思わずにはいられない地味なカレンダーは大きく揺れているぞ」

「詳しい説明ありがとう。それを掛けているお前もどうかと思うが、ここが原因のようだな。トンカチと釘を持って来い」

「せんせー！監督に甘やかされて育ったがためにどこにあるかまったく知りません」

「じゃあ、紙を貼って明日染岡にでも頼んでくれ」

「テープはどこですかー」

「・・・」

「おい！豪炎寺！逃げるなよッ！」

「残念なことに充電がもう少しで切れそうだ」

「お前はロボットかっ！！！」

「今は認めてやる」

「のーさんきゅーだっ！！！おい！こら！まてっ！！」

３：２８

を時計は指しています。

明日、つまりは今日。

マネージャーの一人とエースストライカーが寝坊したのでした。

夜中の隙間風がウザイです／ギャグ／豪炎寺（後書き）

私の今すぐ叶えられる希望はたまには早く寝たい。です。

ギャグむずい。

ギャグになっているか心配だ。

テスト前日。平均点を下げに行こう／ギャグ／鬼道・円堂（前書き）

鬼道は頭いい。

円堂は馬鹿。

テスト前日。平均点を下げに行こう／ギャグ／鬼道・円堂

ピコーンピコーン

ズバババっ

カチャカチャ

電子音ハーモニー

ドアの外からでも聞こえるそんな音。

「だから。ゲームやってもかまわんがっ・・・なんで俺の部屋でやるっっ！！シーズン！！円堂！！！」

ベッドの上に寝っころがりながらカチャカチャゲームをしている私。

と

カーペットに寝っころがっている円堂。

に鬼道がなんか言った気がします。

あれ？言った？

記憶がないけど・・・まぁ、いっか。

「聞いているのか・・・！お前ら」

「おい！ちょっ！たんまっ！」

「だめー。たんまなし。う・・・よっしゃっ！」

「あっーーーー！！！！！！」

円堂が叫んだよっ！

そして、私、勝ったよ！

サッカーで円堂に勝った！！

ゲームだけど。

無敵のキーパー円堂から点をうばったよ☆

ゲームだけど。

「またシーズンに負けた。なんで出ないんだよ。でかい手ー」

「普通は出ないよ。超次元だよ。でたら」

「俺は出るぞ！！」

「了解」

そこは軽く流すことにした。

運動神経マイナス何とかの私でもゲームなら勝てるんだ。うむ。

「ちぇー。もう一回だ。シーズン！！」

「おう！！」

「おいっっっ！！！！！！」

「なんだ鬼道いたのか」

「あ。ホントだっ」

今気づいた。

そういえばここはどこだっけ？

「お前ら。いったい明日を何だと思ってるんだ？！」

明日ー・・・。明日はえっとぉ・・・

「思い出せるか？円堂」

「なんかひっかかるけど・・・」

「テストだ！！！テスト！！！！！」

あぁ。そうだ。

こりゃうっかりー

「頑張れっ！鬼道！」

「うぜっ」

「なんだとっ！？マネージャーに向かって！！！」
「うざいからウザイと言ったんだ！」
「まーまー」
「なんでここにいる！」
「そりゃあ！テストの平均点を下げるためだっ！！！」

あ。言っちゃったよ。
うそつけないな。私。てへっ☆

「なんだその目的は！！」
「暇だったんだよっ！！」
「勉強すればいいだろう！！！」
「だから。円堂と勉強しようってことになったんだ！」
「その結果がこれか？！」
「平均点を下げればその分だけよくなるだろうが！」

「馬鹿なことしていないで勉強しろ！」

「よし！じゃあ教えろ鬼道！！」

「・・・なぜ？」

「よかったな！円堂！鬼道が教えてくれるって！」

「まじ！？よくやった！シーズン！」

「マネージャーの優越というヤツだ」

［マイナスイオン？］参照ってことで。

「なんだ？まぁ、いっか。それでだ。鬼道。テストで出るとこ教えてくれ」

「お引取り願おう」

「鬼道！集大成ってなんとよむんだ？」

「なんだ？これは！集大成？どうよむんだ！！！」

「お前ら。文章なれしすぎだぁあああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

「あつおおな？」

「おお！それだ！」

いえーい！ハイタッチ！

「なんで正解が一文字も出ないんだ！！！最後を成るって読むほうがお前らの知能からすればすごいぞ？！
成功の”せい”だろうが！！」

「違う！シーズン！これは・・・じゅうだじょう！！」

「もう意味がわからん」

「えー？そうなのぉ？」

「シーズンも納得するな！！」

「答えは？鬼道」

「あ？答え？”しゅうたいせい”だ」

「「・・・えーーー」」

「納得できない顔をするなぁぁぁあああああーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

もちろんシーズンと円堂のテストはボロボロってことで。

鬼道は前より１０点国語の点が下がったらしいです。

テスト前日。平均点を下げに行こう／ギャグ／鬼道・円堂（後書き）

集大成。

私は読めるけど書けないです。
テストで例のごとく間違えた。

リクエストとか感想とか・・・受付中です。なかったらいいですっ

病気とおにーさん／甘い／基山（前書き）

まさか初甘がヒロトになるとは・・・！
自分でもびっくり！

病気とおにーさん／甘い／基山

ごほっごほっ

風邪です。

今年も風邪の季節になりました。

「さむっ」

ブルッと体が震えた。

サッカーの見学ってきついね。

やってるわけじゃないから温まんないもんね。

あー、寒い。

「大丈夫？シーズンちゃん」

「大丈夫。大丈夫」

秋ちゃんが話しかけてきたけど、なんもしないマネージャーの世話をかけせるわけにはいかない。

自分のこと。

ごほっごほっ

のど痛くて死にそー・・・

今日は早く寝よ。

「みなさーん。15分休憩にしまーす」

秋ちゃんがみんなに声をかけて一斉に集まってきた。

いけね。

風邪うつしたら悪いよな。

移動しよ。

ということで場所を移動。
芝生の上に。

ごほっごほっ

「やばい・・・」

こんなに医者に行きたいのは久しぶりだ。
薬がないからなぁ・・・

「シーズン」

「ん？」

ぼすっ

顔を上げると視界が隠された。
もがくとガサガサと音がした。
ジャンバー？

あったかい。

「基山？」

すぐそこに基山が。

息を切らしていた。

どうしたんだろう？

「基山？」

「ちょっと待って」

すぐ隣に腰掛けた。

息を整えているみたいだ。

待とう。うん。

ごほごほっ

「大丈夫？」

「シーズンこそ。大丈夫？」

「え？」

「風邪・・・ひいてるんでしょ？」

「・・・まぁ・・・そうだけど」

「はい。これが薬。中に説明書ついてるから。あとマスク。水もあげるよ」

次々と渡された。

「え？くれんの？」

「うん。さーて。練習行くから。うん」

「ん・・・ありがと」

ごほごほっ

基山が立った。

ポンッとジャンバーの上から頭に手を置いて

「早くよくなれよ」

と小声で言われた。

基山は気恥ずかしそうにしながらグラウンドへ走って行った。

「・・・やばい・・・ちょっと照れた・・・」

顔が真っ赤になったのを感じた。

きっと風邪のせいだ。

うん。きっと・・・そうなんだ。

病気とおにーさん／甘い／基山（後書き）

ヒロトはお兄さんタイプだと思います。
最後のほうは結構自分も照れました。

恐ろしすぎる神クッキング！／ギャグ／韓国組（前書き）

短編なのに長くなった・・・

恐ろしすぎる神クッキング！／ギャグ／韓国組

「これからカレーを作りまーす」

「了解した」

（なぜ私は巻き込まれたのだろう？）

台所。なう。

バーンとガゼルがカレーを作るらしい。↑人ごと

「よし。まずは水だな」

パイプ椅子に座って見学。

「カレー粉。カレー粉」

「おい。晴矢。この前、テレビで見たんだがりんごジュースを入れるといいらしいぞ？」

（お、合ってるじゃん）

「りんごジュースなんてないぞ？」

（それはそーだよなー）

「オレンジジュースならあるが」

「うむ。それでいい」

（いいんかいッ！！！！！
いいならいい。うん二人がいいなら止めないよ）

「では入れるか」

大きい鍋に入っているお湯のなかへオレンジジュースを・・・

（・・・見てない。見てない。まさかペットボトル一本入れたなんて・・・信じないよ・・・うん）

「あっ、風介。忘れてる」

「お、そうか」

（まだ、ニンジンとかタマネギとかいれてないもんね。カレー粉先にいれた時点でアウトだよね。普通は）

「あれだな！」

「カレーには欠かせない」

「「キムチ！！！！！」」

（韓国っ！！！！！！！！

名前バリバリ日本なくせにっ！！！！！！

しかもスゲー入れてる。恐ろしい）

「これで少し煮て出来上がりだなっ！！」

「うむ」

「じゃあ、私はご飯を・・・」

お米洗って炊飯器にいれ、スイッチオン。

そこだけが料理らしい。

「あ、カレー？」

そこにアフロディがやってきた。

「こんにちは。シーズンちゃん」

「こんにちは。アフロディ」

「「あ、照美」」

「風介。晴矢。料理？カレーだよね？見せて」

「「嫌だ」」

なぜそんなはっきり?!

「これ?これだね」

ご覧の通り。
赤い液体。それがカレーだよ。

「うわぁ。キムチだ。キムチっ」

長年日本にいながら味覚が韓国なのね。この人たち・・・!

「んー。でも・・・これ入れたらもっと美味しくなると思うんだよねー」

「!!!!!」

「なに?あれ」

パイプ椅子に再び腰掛けながら質問。

アフロディの手に数本持たれたこしょうの容器のような物。

「「知らんっ！！！」」

「とーにゅーーーーっ！！！！！！！！」

「「やめろおおおぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！」」

ツッコむ暇もなく粉が投入された。

どぼどぼどぼ

あれ？粉って大量に入れるとこんな音がするのね。

うわっ☆びっくりっ☆

「入れちまった・・・！！」

「ヤバイな。かなり」

「だからなんなの？」

「「知らんっっっ！！！！！」」

くわーーーーッ！！！

そのパターンはいいからっ！！！

「アフロディ。それ何？」

アフロディがサラサラの金髪を揺らしながら振り返った。

にこりと笑った。

「神の粉」

「はぁ？！なんでアフロディがそん何持ってるの？！」

「シーズンちゃん。僕を誰だと思っているんだい？」

ガゼルとバーンが密かに落ち込んでいるのを完全無視し、話を進める。

「神だよ？神が神の粉を持っているのは当たり前だよ」

「そんなんだぁ！ーーーーーーーーーーーって、えぇ？！アフロ

ディは神なの？」

「そうだよ。最近、天空の使徒とかなんとか言うのが出てるけど僕は神だから。あの人たちより上だから。神だし」

今の瞬間、アフロディを見失った。
神はわからんなー。
そして、私は一般人で良かったと思う。

「さーて。そろそろ煮えたかな」

ピーピー

「あ、ご飯炊けた」

「よし。じゃあ食べよっか。シーズンちゃん。座っててよ」

「それはもしかして私にもそのカレーを食べろと？」

「もちろん」

「全力でお断りします」

「まぁまぁ」

ーーーっ！

さすが神は速い。すぐに行く手を阻まれた。

ま　じ　か　！！！！

数分後。

「うー・・・・」

「「・・・・」」

私とガゼル、バーンはキムチ、オレンジジュース、なぞの粉が入った別名・地獄カレー
とにらみ合っていた。

横目でチラリとアフロディを見るとすっげぇ笑顔だし

「（ちょっと！食べてよ！！！）」

「（バカを言うな）」

「（お前が食えよ）」

「（もとはと言えばあんたらのカレーでしょ？食え！）」

「「（嫌だっ！）」」

完全に拒否りやがる。
こうなったら最終手段！

食　わ　せ　る　！　！　！

だ。

二人からスプーンを奪い、二人の所からカレーをとった。

それを二人の目の前へ。

これで死んだら殺人者か。

こまるーっ

「さーっ！はい。あーん」

だが、自分が死ぬよりましだ。

まだ死にたくねーよー。

ガゼルとバーンがアイコンタクト。

せーのっ

「「・・・！？」」

「死んでないっ！？」

まず、カレーをのどに通した二人が生きていることを疑う。

「「ごらんの通り」」

ひとまず安心。

「「うまい」」

「・・・。・・・・うえぇ？！」

生きてることが奇跡なのに・・・。

まさか再び奇跡が？！

「うそっ！幻だ！」

「「食わせておいてカレーを完全否定するか！」」

「シーズンちゃん。食べてみるのが一番手っ取り早いよ。はい。あーん」

アフロディがニコニコと笑いながら私のスプーンを乗っ取ってました。

そのまま自分で食べればいいのに。

と思う。

「・・・」

一瞬、ガゼルとバーンを見てからカレーを恐る恐る口に入れた。

「・・・？」

銀河?!いや、天国?!

が見えた・・・！

うまい！

「うまいっ！」

素直にアフロディに言った。

アフロディが笑う。

「神だからね。ほら、もっと食べる?あーん」

次は抵抗なくカレーを口にいれた。

「味”だけ”は良いんだけどね」

その言葉を私を含めた三人は聞き逃すことはなく・・・

「「「”だけ”！？」」」

「うん。”だけ”」

アフロディが怪しく笑った。

「「「助けてえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！」」」

この後、三日間の腹痛に見舞われた。

死なないだけマシ。

今日の格言

神の粉は危険

恐ろしすぎる神クッキング！／ギャグ／韓国組（後書き）

イナズマキャラのなかで一番アフロディが好きですっ！

アフロディは神ですっ！

可愛すぎ～っ

はっぴーにゅーいやーと。その前に／ギャグ／風丸・豪炎寺・鬼道・吹雪（前書

吹雪が変態キャラに・・・っ！吹雪ファンさまスミマセン！
基本吹雪はこういうキャラで・・・

はっぴーにゅーいやーと。その前に／ギャグ／風丸・豪炎寺・鬼道・吹雪

「・・・最近気がついたんだけど・・・もうすぐ新年だよね？」

「気づくの遅くないか？！」

「もう、１２月だしな」

風丸がツッコミ、豪炎寺が同意。

「いくら世界大会だからって年越しまでサッカーなんてひどくない？」

同じテーブルで夕食を食べていた三人がうなずいた。

前が風丸、隣が鬼道、斜め前が豪炎寺。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！！！！毎年一番最初に会うのは妹と決めていたのにっ！！夕香ぁぁぁ！！！」

豪炎寺が叫んだ。頭を抱えて。

「この変態シスコン野郎！！！」

「うぅぅぅーーー」

「夕香ちゃんもこんなお兄さん嫌だろうな。かわいそっ！」

「何がだ！！何が問題だ？！」

「全部だっ！」

「んー・・・でも確かにこの状況で一番最初に誰に会うんだろうね」

風丸が冷静に言った。

「あ、いっその事誰かの部屋に集まって年越す？お菓子とか持ってきて」

「おごらせる気か？」

「話が早い！」

「うぅーーーっ」

「うるさい！シスコン！」

「シーズン。じゃあ、僕と一緒に年越そう？」

吹雪が話しに入ってきた。

「そして、僕が年一番に見るのも朝一番に見るのもシーズン☆」

吹雪が妄想し始めた。

「その妄想やめいっ！」

風丸がゆさゆさと吹雪を揺すり、妄想から帰ってきた。

「言っとくけどそんな予定ないから！これからも！」

「そうかなー？今夜辺りは・・・」

「ねーよっ！勘違いされるようなこと言うなっ！！」

「とにかく。集まるのか？集まらないのか？」

黙っていた鬼道が口を開いた。

みんなが私に注目した。

「・・・・・ひとまず、クリスマス会しよっか？」

「「あぁーーー」」

「聖夜だし。いいね」

クリスマスを忘れてました。

そして、豪炎寺は未だ病んでいます。

映画の真実。運命変わっちまった／ぶっちゃけ／アフロディ（前書き）

映画公開おめでとぉーっ！

映画の真実。運命変わっちまった／ぶっちゃけ／アフロディ

「ついにイナズマ映画公開！！映画館チョー満員です！」

あ、これ実話です。

第一公演目に行ったけど満員で席がとれなかった。

「おめでとぅ！」

心からの祝福ですっ！

「・・・・・全然おめでたくない」

「あれ？きみは・・・自称・神のえーっと」

「アフロディ！！！！！」

「あ、そうそう」

「ひどい・・・うわーん！僕の未来はかわったよぉう！」

あ、泣いてると可愛い。

アフロディの未来は変わったようです。

「たしかにポスターに描かれているわりには出番少ないよね。そして最終的には作ったアニメを丸ごとカットされるという」

「言わないでっ！」

「てか、あれじゃあ、後に仲間になるって時に、「あんた、だれ？」ってなるよね」

「神のアクアを使っていることも知られずただの強い人で終わった」

「かわいそう。同情してあげる。今は亡き影山零治の策略とも知らず・・・っ」

「・・・今、完全笑ったよね？シーズンちゃん」

「ごめんなさい」

「運命って恐いね」

「うん。・・・っ」

「シーズンちゃん」

「ごめん。だって・・・っ」

「オーガよりえらい大人が恐いよ・・・・・・」

「アフロディ。それ言ったらおしまいだよ」

「あ、でも僕のこと神って言ってくれたのは嬉しかったからお礼言っといた」

「何気いい子だな!?」

けなげにいい子だったんだ。
アフロディって。
意外です。

「とにかく僕を話にもどしてそして、円堂と戦わせてください」

「神からのお願いだね」

「あ、シーズンちゃん。ありがと。神って言ってくれて」

「いい子っ！」

映画の真実。運命変わっちまった／ぶっちゃけ／アフロディ（後書き）

素直に感じたこと。

アフロディのその後が気になる。

映画は面白いですっ。

３Ｄめがね重いよね！

美少年とメイド喫茶へ行こう！／ギャグ甘／佐久間・他（前書き）

マイナーキャラフェスティバル？
今回少し大人の事情が・・・。

美少年とメイド喫茶へ行こう！／ギャグ甘／佐久間・他

「佐久間ー」

「なんだ？シーズン」

廊下で佐久間を見つけました。

「メイド喫茶に行こう」

「なっ！！なんで突然！？」

佐久間の顔がいっきに赤くなった。

可愛い。

「行きたいなー」

「嫌だよっ！目金でもさそえばいいだろ？！」

「佐久間と行きたいんだよぉう」

「知らない。とにかく俺は絶対行かない」

「固いなぁーっ」

「なんとでも言えっ！」

「源田に言いつけるからなぁーっ！」

「どうにもならんだろ。それ」

「まぁ確かに」

言ったとしても「あっそ。佐久間も大変だなーっ」って言われて終わりだろうな。

「行こうよーっ！」

「行かないって言ってんだろっ！」

「今日は午後の練習ないんだからさー」

「ったく。うるさいっ」

「ホントにっ！」

「嫌だ」

「話が進まないんだよぉっ！」

「だからーー」

全然のってくれないので無理やり連れて行きました。

☆

「うわー。ここが・・・ねぇ」

「し、シーズン。なんで・・・メガネっ?!」

無理やり佐久間にメガネをかけさせました。

「可愛いぞーっ」

「う、うるさいっ!」

照れて顔が真っ赤になった。

可愛い。

「さー。レッツゴー!」

「シーズン！マジで入るのか？！うわっ」

ウィーンと自動ドアが開いて、

「いらっしゃいませ。お嬢様」

定番のご挨拶をされました。

「こんにちは」

「2名さまですね？」

「はい。あ、ちなみになんですけどこの子。男の子なんですよ」

「え？すっごく可愛らしいご主人様ですね」

さっきから佐久間が全然話そうとしないのでメイドさんに話をふってみた。

「ほんとですよねぇ」

とメイドさんとの交流を楽しんで。

メニューに目を向けた。
またすごい名前のメニューで。
佐久間の反応を楽しみながらメニューを見る。
すると。

「ねぇ、君たち。ここ。初めて？」

おそろしい。もう来た。
おそるおそる。横を・・・

「やっぱり、おまえらかぁ！！！！！」

メイド喫茶といえばこの二人。
できればこんなに早く会いたくなかった。
いや、会いたくなかった。

野部流（のべる）　来人（らいと）
と
漫画（まんが）　萌（もえ）

いや、佐久間とこの二人にはちょいと大人の事情があるわけで・・・

「残念だけど・・・もっと居たかったけど・・・」

「？」

「帰るよっ！佐久間！」

「急に？！」

「メイドさんすみませんっ！今度来た時はなんか注文しますから！
ほら。佐久間はやくっ！」

「うん」

佐久間が異常に笑顔になって差し伸べてもない私の手を握ってきた。

それは後でツッコむことにして。

「ありがとうございました」

メイドさんにお礼を言い。
店をなくなく後に。

「もうっ！佐久間のせいだからね！」

「シーズンが無理やり連れてきたんだろうがっ！」

「そうでした？佐久間がどうしても行きたいと・・・」

「言ってません」

「・・・いい加減、手を離してくれると嬉しい」

「・・・嫌だ」

佐久間がそっぽを向いて言った。

「何故にっっっ？！」

「無理やり連れてきた罰だよ」

「なっ！？」

その後、合宿所に着くまで手を離してくれなくて・・・変な噂がたちました。まる。

☆

「メイド喫茶で働いて以来のドキドキ感だったわ」

「ホント。初めてのお客様はお客様の方が普通は照れるのに」

メイドさんたちが話していた。

「あれ？野部流さん。漫画さん。なにを考えてるんですか？」

「「次はあの二人でいこうっ！！！！！」」

二人の声が見事にハモリ、

☆

「シーズンさん！佐久間くん！」

目金が佐久間と二人でいた所を話しかけてきた。

「なに？」

「？」

「これは一体！！！どういうことですか！？」

目金が見せてきた雑誌に目を向ける。
佐久間も後ろから見てきた。

「な・・・」

「これって・・・」

そのページには、漫画萌の漫画の表紙が載っていて・・・

「どう見てもシーズンさんと佐久間くんですよね？！」

たしかに眼帯とか緑っぽい髪とかまんま佐久間だけど・・・

「おれ！女じゃないぞ？」

すっげーフリフリの服を着ていた。

私はさえない男の子っぽいけど・・・

「シルキー・ナナの後の新連載ですよ?!」

「「まじで?」」

この後。

漫画を描いた奴の所へ殴りこみに行った。

そして、その物語は一話しか描かれなかった幻の作品としてファンの間ではプレミア物になったらしい。

美少年とメイド喫茶へ行こう！／ギャグ甘／佐久間・他（後書き）

今、イナズマを一話から観てますっ。

途中から観た者なのでこの話って前にしたのかなー？

とか確認中。

大掃除をしよう！・・・と試みる／ほのぼの／鬼道・風丸（前書き）

一年早かったなぁ・・・

今年はイナズマに出会えた記念すべき年だぜぃ！

大掃除をしよう！・・・と試みる／ほのぼの／鬼道・風丸

「二人とも手伝ってっ！おねがいっ！」

新年になるというのに部屋が片付かないです。

なので、すでに自分の部屋の掃除が終わっている、鬼道と風丸に手伝ってもらえるように頼みこみ中です。まる。

「シーズン。まだ終わらないのか？」

「お前はいつもだらしがなさ過ぎるんだ。一応、女だというのに」

「一応は余計だっ！」

少しキレて、鬼道と風丸を引きつれ自分の部屋へ。

「おじゃましまーす」

「・・・」

風丸はいい子だなぁ。
鬼道はへそ曲がりかいっ！？
「まず、風丸はそこら辺の本を片付けてくれる？鬼道はそこら辺のプリントをまとめて？捨ててもいいし」
「わかったよ」
「なぜお前に命令されなきゃいけない！？」
「いいからやれや！」
「お前だっ！」

話が進まないので掃除しよう。

「今年は楽しかったなぁーっ！」

掃除を少しサボって伸びをした。
鬼道がちょっと見てきたが少し無視。
「それにしてもなんでこんなにプリントが・・・」

「いやぁ・・・いろいろあるんだよ」

「シーズン。一言いいか？」

「なに？」

「シーズン。はっきり言うと、・・・女の部屋とは思えない。てか、思いたくない」

今まで優しかった風丸がぐさりと心に刺さることを言い出した。

かなしきかな。

「ごめんよっ！風丸！」

本気でショックだった。

鬼道はそういうキャラだからいいとしても風丸は本気で思ってるからなぁ。

「いや、いいけど」

見捨てられたっ！

今年一番悲しいかも・・・。

来年はこそ！と思う。

「今年は楽しかったねっ！」

「まぁ、そうだな」

「いろいろあったなぁ」

なにはともあれ、やはり、この二人は話にのってくれる。
うれしいね。

風丸と鬼道を交互に見て、右手で風丸の手、左手で鬼道の手を握った。

二人が自分の方を見て、作業を中断する。

「来年も楽しくなるといいね♪」

風丸と鬼道が笑った。

「来年もみんな一緒だといいねっ！」

「そうだといいな」

「あぁ」

「でも来年もこの部屋を片付けると思うと嫌になるな」

「え？風丸、来年も手伝ってくれるの？！」

「シーズンが女の子らしくなったか確かめないとだからな」

「うわーい！」

「シーズン来年はプリントまとめとけよ？」

「うん！頑張る！」

来年もみんな一緒だったらいいな。って心から思った。

うん。来年も楽しくなるといいな。

みんな相変わらずサッカーしてて、みんないろんな技が出来るようになって。

きっといい年になるよねっ！

「さーっ！二人とも！さっさと片付けて年越そうぜぃ！」

「「シーズン！お前が一番頑張れよっ！」」

大掃除をしよう！・・・と試みる／ほのぼの／鬼道・風丸（後書き）

ちょいと意味がわらなくなってしまった・・・！

色々、省略していった形がこれだよねっ！

リクエストとか感想を受け付けてるよっ

なんだったらメッセージに送ってもらってもいいし。

別に強制なわけじゃないんだからねっっ

未来から突然・・・帰れ！／ギャグ／カノン・鬼道（前書き）

やっと更新できたぁー！

あ、今回。初リクですっ☆

リクエストって嬉しいねっ

マジで感謝しとりますっ！

未来から突然・・・帰れ！／ギャグ／カノン・鬼道

雷門中ＶＳ王牙学園

の試合ビデオを春奈ちゃんに借りて見ました。

過去の試合を見るのって結構面白いんだよ。

☆

「きどー」

「お前、まずペンを持つことから教えなければいけないか？」

無理やり鬼道が勉強を教えると言い出したため、鬼道の部屋。なう。

「ペンじゃないよーシャーペンだよー」

「やかましいっ！」

かるく逆ギレされた。

「そーいえば。カノンてさー」

「あ、呼びました？」

「んー？！？！？！？！？！？！？！」

円堂のひ孫こと円堂カノンが鬼道のベッドの上にっ！

寝不足かな？

ちょっと幻が・・・

「シーズンさん。夢じゃないですよ。見ましょうか。現実を」

うおっ！肩に手を置かれた！

やーめーてーっ！

「シーズンさーん」

幻が・・・

「だぁーーーーー！！！！！どこから来た！？なぜ来たっ！？そして、来てＯＫかいっ？！」

「あはっ。シーズンさん。やっと気がついたっ☆呼ぶからですよ？」

「しらねーよっ！来るなよ！帰って！夢のうちに帰れぃっ！」

「ひどいなぁー。シーズンさん」

きらきらの笑顔で言ってもダメだよ。

「未来変えていいのかなー？」

「いいともーっ！」

お昼にやっている有名番組になった。

ー閑話休題ー

「で、なんで来たんだ？」

いきなり鬼道が進行役をしだした。

鬼道いたんだー。

「未来変わっっちまいますぜよ？」

「シーズン。普通に言おうか」

「スミマセン」

「聞いてくださいよ！大変なんです！初夢何見ました？」

「「唐突っ！！！！！」」

「赤富士と鷹となすびを見たんですっ！まぁ、それはどうでもいいんですが・・・」

「どうでもいいのかっ！？やられたっ！」

「シーズンさん。目の前にあるのが真実だとは限らないのです」

「むきーーーーっ！」

こいつっ！チョーむかつく！！！

「あ、シーズンが壊れた。で、なんなんだ？大変な事とは」

「あ、はい。実はですね・・・

今年、お年玉が少なかったんです。

だから、お年玉下さい」

「あ？なぜ？」

「だって、ひいじいちゃんの友達なんですから、くれてもいいじゃないですか？」

「・・・シーズン。起きろ」

「へいっ！」

「これからこいつを全力で追い出す」

「協力します。兄貴！」

「二人とも冗談きついですね。

・・・え。マジですか？」

未来から突然・・・帰れ！／ギャグ／カノン・鬼道（後書き）

新エンディング超いいですよね☆

特にアフロディが・・・

風丸も歌ってますし。

かっこいいなぁ。

神は気まぐれ。／ギャグ甘？／アフロディ（前書き）

アフロディ率多いか？
それは仕方のないことさっ☆

神は気まぐれ。／ギャグ甘？／アフロディ

「そこそこ、そこの自称・神！」

女の子向けの雑貨屋でアフロディを発見し、話しかけて見た。

「・・・ん？あ、シーズンちゃん」

無駄にさわやかな笑みをうかべている。

たぶん男だったら、いや、女でもこの笑顔を見せられたら銀行口座にお金をつぎ込む。絶対。確信。

「神よ！願いを叶えてくれ！」

「嬉しいね。シーズンちゃん。何かな？」

「アイス食べたい」

「ここ、雑貨屋だよっ！？」

「空腹は突然に」

「神はそんなつまらない願いは叶えないよ」

「ここにいたことみんなにばらすぞっ！」

「神を脅迫する気？罰当たりだなぁ。それに僕は美と愛の神なんだよ？この美貌はみせられても、愛を育めても、叶えられないなぁ。アイスはそこら辺の人に頼みなよ」

「まず、自分で美貌言うな」

「あ、このストラップすっごい可愛い。シーズンちゃん買う気ない？」

アフロディが手に持っていたのは、ふわふわした生地のハートのストラップ。

「それ、持ってるよ？」

カバンから携帯を取り出して見せる。

「あ、ホントだ。色違い。シーズンちゃんが買ったの？」

「いや、友達が誕生日にくれた」

「確かにシーズンちゃんはこういうの選らばなそうだもんね。すしストラップの方が似合う」

「失礼な神だなーっ！アイス買え！アイス！」

「じゃ、これ買ってくるね」

「え、そのストラップ買うの？」

「うん。すしストラップの方が断然似合うシーズンちゃんと色違いオソロだからね」

「どんな理由！？！？」

「待っててね。シーズンちゃん」

「アイスーっ」

「気が向いたら買ってあげるよ。待てだよ！待て！」

「立向居みたいに犬じゃないっ！」

この後、アフロディにアイスを買わせることに成功した。

神は気まぐれ。／ギャグ甘？／アフロディ（後書き）

３回イナズマの映画を観た。

今のイナズマが終わるって聞いた。

泣く。号泣ですっ。

１０年後とか・・・

円堂、監督とか・・・

あいつらの高校生活を知る権利があると思う！

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々（前書き）

ある日、合宿所で起きた謎の事件・・・

・・・ではなく！なんかわかんないけど推理しない推理小説やっちゃいますっ！

全４話！

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々

「えー、色々ありまして・・・いや、監督がなんか推理小説にはまったらしく、これからなんか推理しますっ！」

「それって午後ドラみたいなのか？」

「円堂！正解！今日だけはさえてるみたいだ。えっと・・・カメラはあらかじめ佐久間にお願いしてみた」

「巻き込まれたくはなかったんだけどね。監督命令だからね」

ちなみにここにいるのは

円堂・風丸・豪炎寺・鬼道・吹雪・不動・佐久間

のおなじみのメンバー。

「内容はどうなんだ？」

「鬼道くん。いい質問だねぇ。それはだね・・・即興だよ！」

全「即興っ！？！？！？！？」

「台本など存在しないのだよ」

「自慢したいらしいが、そうもいかない」

「だから、即興で。簡潔にまとめる」

「おう。頑張れ」

「風丸っ！逃げられない現実がそこにある！」

「う・・・」

「ではではさっそく

・・・円堂！倒れてっ！」

「うえぇぇぇ！？ちょっと、いきなり！？」

まず円堂を床の上で横になってもらい・・・

「円堂。死体ね」

「えぇ！？すでに死んでるの！？」

「頑張れ。円堂くん」

「じゃっ、風丸はこの天才美少女探偵のアシスタントで他は解散っ！」

全「自分で美少女いうか？」

「うるさいっ！監督命令だ！そして、死体は動くなっ！」

円堂は死体の自覚がないらしい。

しょうがない奴だ。

「かいさーんっ！」

「お前はホー〇レス中学生の父親か？」

「豪炎寺。ホーム〇ス中学生をしっかり読んでいるのはわかったから。散れ！」

で、ここには死体（円堂）・アシスタント（風丸）・カメラマン（佐久間）しかいなくなったわけだ。

だいぶスッキリ。

「佐久間。今回、一発撮りでいくから、死体撮って事情聴取に行く」

「わかった。念のため確認しとく。俺、出番ない？」

「もちろん」

「カメラ回すよー」

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々（前書き）

一気に第２話！

さて、真剣に捜査・・・する気もないですけど犯人探ししますかっ

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々

「よし、この人が死んだのは今さっきと見られる。以上」

「色々ツッコむけど・・・今さっきだったらシーズンが一番怪しいし、それに・・・刑事じゃなくて探偵だよね？」

「うむ。・・・いつもはいなくなった犬を一緒に探したりするだけだから何をすればいいのか・・・」

「殺人事件になぜ呼ばれたの！？それが一番の謎だよねっ！」

「風丸くん。いろいろ大人の事情があるわけなんだよ」

「ここでそれを出すか？てか、大人って監督しか関係してないし」

「さ、次行こうか。豪炎寺から」

死体役お疲れ様ー。

「豪炎寺ー」

「げっ、さっそく来たか」

廊下で豪炎寺を見かけた。

さっそく・・・

「えんどぅーをコロシタノハ、オマエカ？」

「「「唐突っっ！！！しかも変だっっ！！！！」」」

カメラマンも声をあげた。

「こらー。佐久間ダメだろー？」

「スマン」

「そんな唐突に聞いて素直に答える奴がいるとは思えん」

「で？」

「俺が殺しました」

「「「あっさりっ！！！！！」」」

「豪炎寺、お前！早く終わらせようとしてるな！？」

「バレたか？」

「バレバレだっ！！！」

「これで終わりだな？お疲れ」

「バカ野郎っ！！！お前をそんな奴に育てた覚えはないわっ！！！！！」

「育てられた覚えもない」

「豪炎寺っ！お前は操られてる！」

「肩に手を置かれて青春っぽく演じられても・・・」

「お前は無実だ！よしっ！次行くぞ！」

「え？それで本当にいいの？この人認めてるのに」

「アシスタントは、だまらっしゃいっ！」

「次は鬼道に聞きに行くぞっ！」

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々（前書き）

第３話！

本気で推理する気がないようですが・・・ま、いっか

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々

「犯人でってこい。バカ野郎ーアイスが食べたい気分だなー♪」

「なんて奴だ・・・」

「風丸アイスー」

「俺はアイスじゃない」

「風丸アイスってやっぱりソーダ味なのかな？」

「知らないなー」

「食べたいっ」

「俺を食おうとするのはやめろっ」

「鬼道アイスはまずそうだなー」

「だれがまずいんだ？」

鬼道が後ろから来た。

ラッキー。

「鬼道きっと味がごちゃごちゃしてる」

「勝手に言ってろ」

「ごっちゃごちゃー。ごっちゃごちゃー」

「うるさい」

「Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ」

「いきなりっ！」

「さー、ごちゃごちゃ。どっち？」

「名前がごちゃごちゃになっているのは俺の聞き間違いか？」

「どこの美容室行ってるの？あ、雷雷軒？」

「ラーメンじゃねぇ」

「醤油？みそ？」

「ラーメンじゃない。なる気もない」

「からのー？」

「なにが？はっ？」

「犯人はおまえじゃなーいっ！」

「お、俺・・・ん？紛らわしいっ！」

「さらば、ラーメン」

「ラーメン違うっ！」

鬼道の出番終了。

☆

「吹雪ぃー・・・あれ？部屋にいない。どこに・・・うん。さっき私の部屋にいたのは気のせいだよ。気のせい・・・吹雪っ！！！！！」

「あっれー？シーズンちゃん」

クスっと笑われた。

「あっれー？じゃないよっ！ここで何してるんだよっ！」

「いやー、シーズンちゃんの匂いがするなーって」
「変態ッ！犬みたいなことすんなっ！」
「ごろーんごろーん」
私のベッドが・・・可愛らしいけど・・・
「君は犬の生まれ変わりなの！？」
「ふわー・・・おやすみ」
「おいっ！人の部屋で寝るなッ！風丸もなんかいってよー」
「いや、早く終わらせよう」
「おい！吹雪ー」
「円堂が殺された件だったら不動に聞きなよ。怪しいし」
「んー・・・吹雪も来て」
「なんでー・・・眠いのにぃ」
「ここで寝ようとしてるからだよっ！」
「しょーがないなー。シーズンちゃん、おんぶー」

「バカ野郎」

「ちぇー」

「早く行くよー」

第４話！ついに完結！

果たして犯人は・・・！？

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々

ただいま、吹雪・風丸・佐久間を連れ不動のところへ向かっている。

状況説明終了。

「不動ー。ちょっといい？」

「んあ？あ、やっと来たか」

不動は自室にいた。

何気にいい子なんだよ、不動って。本人は嫌がるけど。

「円堂が殺されたから事情聴取ね」

「やってない。俺はずっとここにいたぞ？」

「おぉ、不良。真面目に答えるのか」

「え？真面目？・・・普通だが？」

「まぁ、そうだよね。でも、否定するなんて怪しい・・・・」

「俺には円堂を殺す動機がないからな」

不良！真面目だ。一番真面目だ！

「動機・・・・って」

窓の外を見るとそこには・　・　・

「見えました！」

「シーズン？」

「この事件の真相がわかりました」

「「「本当か！？」」」

吹雪をぬかして声をあげた。

「犯人は

・・・・・・・・吹雪！君だぁっ！！！！！」

キラーン☆決まったね。

「なっ・・・なんで！？」

おそらく私を困らせようと吹雪が迫真の演技を始めた。

「シーズンっ！どういうこと！？」

風丸、ナイスパス！

「それはだね。吹雪。君は、誰も円堂が殺されたとは言ってないのに円堂が殺されたことを知っていたね」

「それは・・・廊下が騒がしかったから・・・」

「近くには誰もいなかったはずだよ？」「あれ？そうだった？」

「風丸っ！シャラップ！」

「僕は、やってない！無実だ！」

「それはそうだよ」

「「「「？」」」」

「円堂は殺されてないんだからっ！」

「「「「はぁ！？」」」」

あれ？だれも納得できてない？

ま、いっか。

「円堂は死んだふりをしてたんだよ。だから血もでてなかった。傷もないのに殺しようがないからね」

「そんなんでいいのか？シーズン」

「一応推理した。円堂ならほら、外でサッカーしてるし」

我慢できなかったんだね。うん。

確かに死体って暇だもん。

でも、落ち着きがないって一応監督に知らせておくか。

「風丸。私にとけない謎はないのだよ。この天才美少女探偵シーズンにかかればね！」

「シーズンちゃん。もしかしてなんの根拠もなしに僕を疑ったの？」

うわ・・・。吹雪が怒ってる。やっべっ☆

「別に犯人じゃなかったんだからいいじゃない」

「ふーん。シーズンちゃん。よく見ると可愛い顔してるねぇ・・・」

吹雪の笑顔が恐い。

「いや、風丸の方が全然可愛いッス☆」

「シーズン！巻き込むなよっ！」

「本当だ・・・風丸くんもよく見ると可愛い顔してる・・・」

「吹雪っ！目を覚ませ！」

「えっと・・・

私に解けない謎はないッ！

ってことで完っ！」

美少女探偵：シーズン

アシスタント：風丸

カメラマン：佐久間

死体：円堂

容疑者１：豪炎寺

容疑者２：鬼道

容疑者３：吹雪

容疑者４：不動

脚本（即興）：シーズン

完

即興捜査・・・推理してない推理事件？／ギャグ／色々（後書き）

お疲れ様でしたー。

最後はこんな感じでスミマセンっ！

あー。転校したい／ギャグ／佐久間

「シーズン！俺はどうしたらいいと思う？」

「・・・なに？」

突然。佐久間が泣きついてきた今日この頃。

「大会終わったらみんな学校に帰るよな！？」

「まぁ、だろうね」

「俺どうしたらいい！？」

「なにがだっ！結論を言え！結論を！」

「鬼道と離れる」

騒いどいて結論が一言で説明できたよっ！！！！！

「わー。大変」

「シーズン、マジで恨む」

「え！？感謝じゃなくて恨まれんの！？」

「恨む恨む・・・」

「本人の前でわら人形作るのやめいっ！聞いてやる！言い分を聞いてやるからやめといて」

「で、だよ。俺は帝国。鬼道は雷門。もちろん。サッカーの練習も一緒に出来なくなるわけだし。フットボールフロンティアでは敵になるわけだろ！？」

「まぁ、そうだね」

「どうすればいい！？」

「えっ！？ここで元に戻る！？」

「シーズン」

「え？んー・・・あ、転校しちゃえば？一番早い話」

「鬼道の家みたいにお金持ちじゃないからなー」

佐久間くん。否定するなら自分で案を出そうか？

「まぁ、転校はな。うん。確かに無謀だった」
鬼道のために学校かえたりはしないだろう。
さすがにな。

「やっぱり3年の始業式がいいかな？」

「・・・うん。・・・ん？え？まさかの転校っ！？」

「鬼道の側にいれるなら」

うわ。この人キラキラ光っているよ。

なんだコイツ。
もはや鬼道を慕(した)っている限度を超えている。

そんなに鬼道？そんなに？え？そんなにぃー？

「やめとけ。なんか色々と面倒だ」

このままだと本当に転校してくるので止めようと思う。

「シーズン！何故止めるっ！離せ！」

「離せって！いや何も掴んでないよっ！」

「いいや、シーズンは言葉という鎖で俺をだな・・・」

なんか・・・かわいそうな子っ！

いや、どこがって全体的に。

「とりあえずだ。帝国には源田がいるだろ？」

「だってぇ。不動もいるからうまくやっていける自信がないしー」

わかったこと。

源田と不動はプラマイゼロ。

「んー・・・」

帝国のいいところ。帝国のいいところ・・・

「そうだ！佐久間がいないと帝国にペンギンがいなくなる！」

「うおおおおーーーっ！ペンギンっ！」

あ。やべっ☆佐久間の嫌な思い出を掘り返してしまったっ☆

「佐久間。どんまいっ☆」

「雷門に転校するっ！」

誰だー？佐久間泣かしたのー。

あ、自分だ。

「うん。ガンバ！」

数日後。

「シーズン。親がダメだってー」

「よかった」

「あと。源田に止められた」

「頑張れ」

「鬼道・・・」

「鬼道も大変だなー」

あー。転校したい／ギャグ／佐久間（後書き）

最近、風丸が可愛すぎて大変です。

未だにイナズマを最初から見ようと頑張っているわたしですが、１５話の風丸が可愛すぎてしょうがない。

宮坂って佐久間ヘアーですよね・・・。

ファイアードラゴン戦。マジで頑張ってたなー（↑しみじみ

草食系男子は困ります。風丸さん！／甘い／風丸・宮坂（前書き）

今、風丸にハマりすぎてます。ヤバイです。

風丸、かわいいっ！

草食系男子は困ります。風丸さん！／甘い／風丸・宮坂

「あ、こんにちは！シーズン先輩っ！」

昼休み。外を歩いていたら陸上部の一年、宮坂了くんに会いました。

「おぉ！君は風丸の・・・」

「はいっ！後輩兼弟子です！」

「弟子なことは知らなかった」

「シーズン先輩、最近どうですか？」

「ん？何が？」

「いや、風丸さんとです」

「え？風丸はあいかわらずサッカーやってるよ？技も増えてね・・・」

「はぁ・・・。風丸さん。まだ言えてないんだ・・・」

「なにが？」

「いえ、んー。そうなんですか。風丸さんの技・・・へぇ」

興味はなさそうです。

「え？観点間違ってる？」

「風丸さん。シーズン先輩になにか言ってないんですか？」

「？」

「あ、言ってないんですね。これだから最近の草食系男子は・・・」

なんか宮坂くんが悩みだした。

草食系？

「確かに風丸、野菜好きだよねぇ・・・」

え？そうじゃない？

「シーズン先輩、風丸さんを見ていてなんか思いません？」

「何を？」
「聞いた僕がバカでした。すみません」
「いえいえ」
「んー・・・相当、手ごわいですねぇ・・・」
「？」
「シーズン！」
「あ、噂をしてれば風丸！」
「ん？噂？」
「こんにちは！風丸さん」
「こんにちは。宮坂」
「相変わらずキューティクルな髪で・・・」
「え？なんか、ありがと」
「なにか用？風丸」
「あぁ、そうだ。今から部室に資料を取りに行くんだけど。多いから手伝ってもらいたくて」

「わかった。いいよ」

「あ、風丸さん。シーズン先輩と二人っきりですか？」

「宮坂。何を考えているんだ？」

「風丸さん、こわーい。風丸さん！今日こそは！今日こそは言いましょう！」

「お前なー・・・」

「検討を祈ります！頑張れ！風丸さんっ！」

笑顔で走り去って行きました。
さすが陸上部。速いな。

その運動神経を少し分けてもらいたいぐらいです。

「ったく。あいつ調子にノッて・・・先輩に言っておかないと」

「足速いなーいいなぁ」

「シーズン、行こう？」

「あぁ、うん。ねぇ・・・風丸」

「何？」

「風丸、私に言ってないことがあるの？」

「・・・っ！？」

風丸が顔を真っ赤にした。

「な、なんで！？」

「いや、宮坂くんが・・・」

「あいつ・・・絶対許さない」

「ねぇねぇ？何を言ってないの？」

「それは・・・えっと・・・その、だな・・・」

風丸が髪をかいた。

「？」

「いや、えっと・・・言いにくいんだけど」

風丸の顔がさらに赤くなる。

耳まで真っ赤だった。

「俺はね？シーズンのこと、えー・・・なんて言うか・・・・・・・
あぁっ！もうヤバイっ・・・・・・・」

風丸が赤くなった顔を冷ますように顔を振った。

「つまりね？簡単に言うと・・・・」

「うん」

「俺がシーズンのことを・・・うん。

・・・・・・好きなんだよ」

「え？」

「あぁ・・・っうん。うん。ごめんっ。やっぱ資料いいからっ」

「え？ちょっ風丸！？速っ！！」

すごいスピードで走っていってしまった。

あのスピードだったら世界行けた。保障する。

「じゃなくてっ！・・・今・・・告白された？あれ？嘘っ・・・風丸が言えなかったって・・・・・・本当に？」

ちょうどその時、予鈴のチャイムが学校中に鳴り響いた。

草食系男子は困ります。風丸さん！／甘い／風丸・宮坂（後書き）

甘いと思いますっ。

キュンキュンしてました。一人で。

あ、リクエストとか感想お待ちしてますっ！
いつでも大歓迎です！自分なりに頑張ります！

スミマセン。報酬に目がくらみました。／ギャグ／豪炎寺（前書き）

ある日、あの人に雇われた話です。

スミマセン。報酬に目がくらみました。／ギャグ／豪炎寺

「よう！豪炎寺！」

「おぉ。シーズンか何か用か？」

あいさつしただけだったけど用があるからいいか。

「うんっ。まぁね」

「嫌な予感しかしないのはなぜだろう？」

「気のせいだと思うよ？全力で」

「そうか？」

なんか豪炎寺って無口だけど勘が鋭いんだよね。

「それ以外にはエイリアンに狙われてるとかしか考えられません」

「あえてスルーする」

「豪炎寺！ベルリンの壁は素晴らしいよぉっ！」

「なんだ？急に」

「きっとベルリンの壁を見たら新たな道が開けるよ？なんたってベルリンの壁だからね」

「ほう。で、ベルリンの壁はなんのためのものなんだ？」

「え？」

「知っていて話しているんだよな？なんの根拠もなく話してないよな？」

なんでだろう。汗が・・・

「えっとだね・・・ベルリンの壁はだねぇ・・・ベルとリンが建てた壁だったような・・・そんな記憶があっれー？」

「ほう。ベルとリンって誰だ？」

「大工さんじゃないのかな？」

「二人でベルリンの壁を？何年かけて誰に許可を取ったんだ？」

「う・・・

・・・スミマセン。負けました。豪炎寺のお父様から頼まれました。すみません」

豪炎寺のお父さん欲深いんだよ。

まだ諦めきってないよっ！？あの人！

「で？いくらで？」

「アイスとジュースとメロンパン」

「バカめ」

「心から反省してます。飢えそうだったから・・・」

「お前は難民なのか！？」

「ごめん。ほんとにごめん」

スミマセン。報酬に目がくらみました。／ギャグ／豪炎寺（後書き）

たまには豪炎寺で書いてみようかと思いましたっ。

ほっておくと風丸ばかりかいてしまいます・・・。

だから・・・ね。

うるさい。誰が？決まっているだろう？／ほのぼのギャグ／鬼道（前書き）

イナズマのこれからを予想するのがあれですね。

なんか、上手になってきましたw

うるさい。誰が？決まっているだろう？／ほのぼのギャグ／鬼道

「シーズン・・・あぁ、うるさい」

「え！？私、なんにも言ってないよぅっ！」

食堂にておとなしくソーダアイスを食っていたら鬼道にうるさいと言われた。

「勘違いするな。お前のことじゃない」

「あぁ、良かった。で、誰が？」

「決まっている。佐久間だ」

「そう」

決して決まってないと思う。

このイナズマジャパン、自称世界一うるさいチームだから。

うるさい奴は・・・ほとんど全員だ。

円堂から始まりうるさい。

「鬼道。このチームのほとんど全員がうるさいと思うのは私だけなのかな？」

「いや、俺もだ」

本人も決まってないと自白。

自白？ま、いっか。

「ふえ？ふぁふぅまがほうしらの？」

「シーズン。アイスを食べるか話すかどっちかにしろ。話が伝わらない。佐久間がなー」

「伝わってたっ！！」

ちなみにさっきは

「で？佐久間がどうしたの？」

って言いました。まる。

「佐久間がしつこい」

「元から元から」

アイスを口に入れられないのでガジガジかじりながら

あー、歯にしみる。

「佐久間が俺と新しい技を作りたいって言ってくる」

「ペンギン何号目？ひーふーみー」

アイスをなめながら

アイス2本目食おうかなー・・・

「佐久間が雷門に転校したいから鬼道家に養子に来たいって」

「ははっ☆まじ勘弁☆」

アイスが終わったので2本目

んー・・・次はイチゴ味にしよう。

「シーズン。真面目に聞く気がないだろう？」
「ごめん。ない」
「聞けよ！」
「わかった。イチゴアイス食べている間にどうぞ」
「佐久間・・・これからどうなると思う？」
「んー・・・帝国戻ってー、鬼道がいないってなってー、病む」
「簡潔にありがとう」
「いえいえ。未来は見えます」
「そうか・・・病むか・・・」
「病む。ペンギン復活かな？」
「笑えない」
「大丈夫。源田は正気だから」
「だよな」
「アイス終わったから。部屋戻る」
「おぅ」

「佐久間もいい奴なんだけどねー・・・」

「わかってる」

「お前のせいだっ！・・・なんて。ガンバ。鬼道」

「ありがとな」

「後であんまんおごって？」

「それは話が別」

「ちぇっ」

食堂を出た後、佐久間が食堂に入っていったが、私はなんにも見てない。

鬼道・・・ことごとく哀れな奴だ。

うるさい。誰が？決まっているだろう？／ほのぼのギャグ／鬼道（後書き）

なんか最後の方、もはやギャグではなかったのでほのぼのギャグにしてみましたっ！

佐久間って、鬼道いなくなったら大変な気がしてならない。

特に源田が苦労すると思いますw

チョコはうまい。／ギャグ／吹雪（前書き）

たまには吹雪出します。

ですが、わたしが書くのはいつも黒吹雪です。

本物吹雪はリクエストとかあったら書こうと思いますっ。

チョコはうまい。／ギャグ／吹雪

「シーズンちゃん。ポッキーあげる」

「え？マジ？さんきゅー」

「ポッキーゲームしよ？」

だれかコイツを逮捕してー。

吹雪がバカな事をぬかします。

「ほら、食べていいよー」

「ははっ☆私は何も見てませんっ」

ポッキーから今は逃げましょう。

後でもらいに来る。

だけど今は逃げる時。

助けてー

「助けてっ！」

「あっ、シーズンちゃん逃げないでよっ」

すぐに捕まりました。

いやー、足遅いってホント嫌だ。
風丸だったら逃げられてたのに・・・・・・

わたしのバカっ！

「れッツポッキーだよ。シーズンちゃん」

「今だけポッキー、大ッ嫌い」

「食べよう？ね？」

「死刑宣告にしか聞こえないよ」

「はい。あーん」

「え？普通にくれるの？ありがとう・・・うわ、やっぱいらない」

吹雪の目がキラキラしていることに気がついた。

黒吹雪恐いわー

「おいしいのに」

「食べたい。ちょうだい？純粋に」

「れッツ」

「やっぱいらない。豪炎寺にでもおごらせる」

「お、シーズンちゃん。これで豪炎寺くんの家族におごらせるのが５１回に達成したよ？おめでとう」

「ありがとう。お祝いに１本ちょうだい？」

「ポッキーゲーム付きです」

「いりません。豪炎寺におごらせます」

「次は１００回目指して頑張って」

「うん。頑張る」

「シーズンちゃん。１本あげる」

「嘘」

「言葉を一言で全部打ち消すのやめて？」

「もらってく」

1本拝借。

「あ、シーズンちゃん。その1本、一生忘れないでね？」

「重いっ！なんかすごく重いよ！？」

「ふふふ」

「恐いなぁー☆」

今度から絶対、吹雪の物は食べないようにしよう。

チョコはうまい。／ギャグ／吹雪（後書き）

もうすぐバレンタインデー。

チョコ食べたい。

思ったことぶっちゃけトーク／ぶっちゃけ／風丸（前書き）

色々イナズマの過去を振り返ります。

そして、ツッコミます。

思ったことぶっちゃけトーク／ぶっちゃけ／風丸

「風丸ってあのジ・エンパイア戦の時、キャプテンだったよね」

「そうだがなにか？」

「いや、後半いたっけ？」

「ひどい・・・」

ジ・エンパイア戦を振り返った。

ジ・エンパイアはあの手の異様にデカイなんだっけ・・・えっと

手で酢？

違った。大きく間違えた。

テレスがいるチーム。

イナズマジャパンが初負けしたあれだよ。

その試合のビデオを見返したらって話。

「風丸、途中で足やっちゃって・・・それからいた？」

「いたよぉっ！」

「すっかり空気になってたねw」

「そのwやめろ」

「風丸だからって本当の風にならなくても」

「うまいこと言ったつもりか？あア？」

風丸がすっかりぐれた。

「何も指示出してなかったねぇ？」

「足が痛かったデス」

今度は言い訳しだしたっ！

「後半、空気だった」

「俺も活躍してねーなって思った。ははっ☆」

風丸が壊れたことを確信した。
さわやかに笑ってます。
どうした・・・・！？

「後半、ヒロトに任せてみましたっ☆」
「どうした・・・！？なにかあった！？」
「・・・別になんでもないよ」

戻った！戻った！

「少しからかってみた」
「風丸、本当に壊れたかと思った」
「ダークエンペラー以来、壊れてませんっ☆」

風丸が自ら悲しい過去を掘り返した。

「うおぉおおおおっ！」

「自滅っ！？」

自滅しだした。

「まぁ、キャプテンは

他<<<<<ヒロト<<風丸<<<<<<<<<鬼道>>>>>>>>>>>>>>>>>>円堂

となってるみたいだ」

あえての推測。

ちなみに豪炎寺は誰かに案をだしてもらって

「わかった」とか「違う方がいい」とか

引っ張れないよ。あの人。

相づちうつだけの役割なんで。

「だよね。風丸」

「何が？」

そうだ。結局、キャプテンは難しいってことが言いたいんじゃなくて・・・

「風丸。もっと存在感だそうか」

「頑張る」

がんばれ。風丸。

思ったことぶっちゃけトーク／ぶっちゃけ／風丸（後書き）

９４話、９５話の戦いを見ました。

風丸・・・・・前半頑張ってたのに、後半「いるかいっ！？」

って、マジでツッコミましたｗ

風丸キャプテンかっこよかった。

黙ってろ！そうすればイイんだよ！／ギャグ／佐久間（前書き）

なんか、書きたくなりました。

黙ってれば・・・ね？

黙ってろ！そうすればイイんだよ！／ギャグ／佐久間

「黙って？」

「シーズン。突然、何？」

「いや、佐久間って・・・黙ってればカッコイイよ？」

「眼帯が海賊みたい？」

「え？何？」

「何でもないよ」

なんだかおかしなことを佐久間が言っていた気がするがあえて無視。

「鬼道。鬼道。言ってるからダメなんだよ」

「なに！？俺から鬼道を奪おうと！？許せん」

「いりませんっ！」

全力拒否します。

鬼道、いらない。

「うーん。黙って立ってればイイ男なんだけど・・・おしいな」

「鬼道」

「うるさいっ！」

「ちぇーっ」

佐久間がすねた。
すねた顔も可愛いのだ。黙っていれば完璧。
口を開けば鬼道だもんなぁ・・・。

「ちょっと手かして」

「ん。どうぞ」

性格もいい子なのだ。
おしい。実におしい。

「あぁーあああっ！」

「なに！？」

「黙ってろの線がでてます。黙りましょう」

「インチキ占い師め」

「あ、バレた？」

「当たり前だ」

手相作戦失敗。

「んー・・・」

「眉間にしわ寄ってるよ？」

佐久間が私の眉間を指さして笑った。

「佐久間ってさー・・・」

「ん？」

「更生したよね・・・」

「うわー・・・赤いペンギンを思い出しちゃうよ！」

「ごめん。ごめん」

「気をつけてよね・・・？」

「了解」

こうやって話してれば普通にいい子だし顔もイケてるんだけど・・・

「鬼道っ♪」

「えぇ！？」

見れば遠くに鬼道の姿。

片目の視力が異常にいいのでしょうか？

「シーズン！もう行くね？」

「うん」

この子はもう黙らせられないと確信した。

黙らなくてもいいと思う。

なんか黙らせるの大変。

結果。鬼道、どんまい！

黙ってろ！そうすればイイんだよ！／ギャグ／佐久間（後書き）

佐久間率も高くなってきましたが、いや、佐久間の話を書くのが面白くて。

相変わらずギャグが下手ですが、頑張りますッ！

テスト・・・毎日平和です。／ギャグ／鬼道（前書き）

テストが返された日の雷門中。

シーズンと鬼道の１場面です。

テスト・・・毎日平和です。／ギャグ／鬼道

「鬼道。テストを・・・」

「見たいのか？お前にはとてもとれない点数だからな。拝(おが)んでいいぞ？」

「いつも嫌味な奴だなぁ。違うよ。テストを・・・交換して」

「は？」

「そのテスト欲しい。ちょうだい」

「バカなのか？お前は」

「１００点のテスト・・・自慢して見たいんだよっ！」

「だからって一瞬でも５０点より点数が低いのは嫌だ！絶対に！」

「バカにプライド高いんだよ！畜生っ！」

「ふはは。バカとはシーズンに一番言われたくない言葉だな」

「うわー、嫌だこの人ー」

せんせー。

この人が私を侮辱します。
なんか罰を与えてください。

「この人、見た目と同じで性格も悪いです」

「見た目！？」

「悪い度。

↓サングラス＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜ゴーグル」

「ゴーグルそんなに悪いか！？」

「お兄ちゃんはゴーグルをつけてから変わってしまった・・・！」

「春奈の言葉をパクるなっ！それは永遠に春奈のものだッ！」

「豪炎寺に引き続き、シスコン？いやーこのチーム本当にシスコンが多くて参っちゃいますよ」

目立つ二人がシスコンってどんなチームだ。

「とりあえず、テストぷりーず」

「そんな英語でだまされんっ！」

「１００点のてすとー。いいなぁ。ほしいなぁ」
「うるさい・・・去れ！」
「お兄ちゃん意地悪ーっ」
「お前の兄になった覚えはない！そして、兄だとしたら泣くッ！」
「そこまで！？ひどっ！監督に訴えてやる！」
「うっ・・・！それはやめろっ！」

監督にはとことん弱いイナズマメンバー。

「テスト、テスト・・・」
「黒魔術！？」
「なんか色々呪います」
「恐い！なんか恐いぞ！？」
「鬼道を3代先まで呪う」
「なんて奴だっっ！地味に嫌だ！」
「だからだね？テストをだね？君」

「シーズンに上から目線されるとこの世の終わりのようにむかつく」

「うえー。ひどいなぁ」

色々あって雷門中は毎日平和なのです。

テスト・・・毎日平和です。／ギャグ／鬼道（後書き）

なんかわからないけど、鬼道とシーズンを対立させてしまう。

鬼道に恨み？

・・・もちろん。ないですよ？

最近、ボカロにハマってます。

あ、一言、言いたかっただけです。スミマセンっ。

猫耳！！！／ギャグ／キャラソンメンバー（前書き）

なぜか突然、ふと、猫耳が思い浮かんだお話。

猫耳！！！／ギャグ／キャラソンメンバー

「イナズマのメンバーに猫耳が生えたとしたら誰が一番似合うかなぁ・・・」

「「「「「・・・・・・・！？」」」」」

キャラソンメンバーこと

円堂・風丸・吹雪・豪炎寺・鬼道

が一斉に私の方を向いた。

「・・・え？なんかまずかったかな？」

なんでそんなに反応するのでしょうか？

私、なんかしたかな？

ありすぎてわっかんねーや☆

いやいや、この流れだと猫耳か。

「猫耳生えたら・・・？」

「「「「・・・・・」」」」

「無視しないで！！！！！」

5人が無視し始めました。

「豪炎寺！しゃべろうよっ☆」

「なんか空耳がぁー・・・」

イラッときたので椅子から落とします。

「猫耳♪」

豪炎寺が思いっきり嫌な顔をしました。

「夕香ちゃんは猫耳が好きだって☆」

「猫耳だぁあぁああああああぁぁぁぁ！！！！！」

豪炎寺が・・・やっぱり妹か。

と豪炎寺以外のキャラソンメンバーの気持ちがシンクロした。

「鬼道も」

「春奈だな！？よしッ！！！！」

なんかもう早い！！！！！

「（どうにかしてよ。風丸くん）」

「（円堂・・・）」

「（諦めようぜっ！）」

円堂が思いっきりの苦笑い。

「「ダメなキャプテンめっ！！！！！」」

「猫耳♪」

「「「はい」」」

諦めた。

降参します。

☆

「猫耳が誰に似合うかな？」

「まず、豪炎寺くんはダメだよ」

「なぜ！？！？！？」

「髪と猫耳の区別がつかない」

「「「「あぁー・・・なるほど」」」」

「納得か！？納得するのか！？」

夕香ちゃんが好きとあって必死。

「えっと。じゃあ、マックスは？」

「あれは元々猫耳だ」

だそうです。

「円堂は？」

「猫耳あっても気づかない自信がある」

飛び跳ね過ぎキャプテン。

「あぁ・・・だね」

「風丸・・・ないな」

「え？俺ないの？」

「あって欲しかったの？」

「いや・・・なんとなく」

「ここで実際にやってみようのコーナー！」

「はぁ！？いらないッ！この世で一番いらない！」

「ここに偶然、青い猫耳があります」

「仕込んだろ！？仕込んだよな！？」

「いえいえ。偶然たまたま」

「風丸・・・」
「なんだよ。円堂」
「偶然ってあるもんだＺＥ☆」
「風丸くん。猫になろうよっ」
「風丸、グッドラック」
「風丸・・・今日だけは・・・譲ってやる！」
「もう仲間なんて嫌だ！！！陸上部に帰る！」
「「「「「まぁまぁ」」」」」

☆

「あ、可愛い」
「似合うぞ！風丸！」
「絵になるよ」
「うむ・・・」

「負けた」

「・・・あぁ。また病みそう」

猫耳！！！／ギャグ／キャラソンメンバー（後書き）

もっと似合う子、絶対いますけどね。

風丸につけたかった。

それだけなんです。

最近、やっとイナズマの第一期が見終わりました。

次はエイリア。第二期突入です！

時計が狂ったババババーン！／ギャグ（前書き）

いきなり思いついたタイトルで即興で書いてみた。

時計が狂ったババババーン！／ギャグ

「あぁ！私の腕時計が止まってる・・・いや、狂った！」

腕時計を見ると夜中の2時をさしていた。

「さっきまでちゃんとなってたのになぜ・・・？」

キョロキョロと辺りを見回すと・・・

いたよ。原因！

タイトルでわかった人！賢いね！私が言ってもあれだけど。

よくイナズマ見てる。

「おい！そこのチューリップっ！」

「んあ？よう！シーズンか。どうした？」

「チューリップの超音波ハンパない」

「チューリップの超音波？」

赤チューリップことバーン。が首を傾げた。

「お兄さん。そんなことはどうでもいいんですが、早くこの時計直さないと大変なことになりますよ？」

「借金取りの真似がうまくなったな」

「そりゃーどうも。って！冗談じゃないし！早くこれ直せやいっ！」

水色の腕時計をバーンに見せ付ける。

「なんで・・・？」

「君の超音波のせい！」

「チューリップじゃねぇ！！！！！」

今頃ツッコむのか。

結構そのネタ前なんだけど。

「時計屋継げって言われてんだろ？」

「誰にだ!?全力で聞くが誰にだ!!!!!」

「時計が狂った。今は夜中の2時ですか?」

「いや、昼間の2時だ」

「・・・あ。間違えたっ☆時計読めなくなった。悪い。マジで間違えた。夜中と昼間、間違えた」

「・・・マジで殴っていいか?」

「やめてっ!暴力反対!」

「幼稚園からやり直せ!!!!!」

「断固拒否」

「ばか。バカ。馬鹿」

3種でバカと言われても・・・

「まぁ、君と私の仲じゃないですか」

「どんな仲だよ」

「意味不明」

「さっきから四文字多いな！」

「緑川がことわざならこっちは四文字熟語にします」

「その知能では無理」

「イエテル！」

「諦めて」

「諦め大切」

「強情だな。シーズン」

「もうやめていい？」

「おう」

「じゃっ！

マジ御免！」

時計が狂ったババババーン！／ギャグ（後書き）

今日は2月22日で

ニャンニャンニャンの日だそうです。

猫耳の話を書いたのに、この日に更新しなかったって不思議。

無計画。なんです。しょうがないんです。

名前だなんて！呼び捨てだなんて！／ぶっちゃけ／風丸（前書き）

全話観ようと頑張っているところです。

名前だなんて！呼び捨てだなんて！／ぶっちゃけ／風丸

「シーズン。次は一体なんだ？」

「はい。風丸の呼び出し率高いですねぇ。ま、それほど風丸を見ているという・・・」

「ん？なにか言ったか？」

「言ってないよー」

じゃあ、さっそく本題へ。

今回気になったのは３１話前後のところで・・・

「風丸は女の子を名前呼びしないキャラのくせに塔子を”塔子”って呼んでるってクレームが殺到だよ！？」

「みんな呼んでるだろ！？」

「風丸はダメだ」

という話です。

ほんとにショックだった。

・・・。はぁ・・・。

「風丸が病むより先に病む人出てくるから止めてっ！」

「そんなことあるのか！？」

「あるわ！無駄にイケメンって大変だなっ！」

ロン毛は嫌いだけど風丸は別っ！

って子いるよ。絶対。

おそらくその一人。

「だってさぁー・・・マネージャーは苗字でしょ？付き合い長いのにねっ！」

「あ・・・うーん。そうだ！夏未は違うだろ！？」

「ほらまた！いーやーだーっ」

「だって、塔子は財前だぞ！？普通に呼びにくいだろ」

「塔子、塔子ってきゃぁあぁぁぁ」

なんか壊れてきた。

ヤバイ。やっべ☆

「ま、てことで。今日の反省ここまで！」

「うん。結局なにが言いたかったんだろう？」

「おそらく。風丸、女の子名前呼び禁止令が出したかったんだと思うよ」

「え？困るんだけど」

名前だなんて！呼び捨てだなんて！／ぶっちゃけ／風丸（後書き）

風丸好きとしては結構気になると思うんだ。

あ、３１話で吹雪初登場ですよね。

可愛かったわ。

旬ネタ。・・・つまり、地震。／ギャグ／鬼道（前書き）

頑張れよ！
やれば出来る子だろ！？
日本！

イナズマ作りだせるのなら大丈夫だ！

旬ネタ。・・・つまり、地震。／ギャグ／鬼道

「うわーっ！停電だって！大変だ！」

「ちょっと待て。シーズン。停電だからって冷蔵庫のアイスを何個も食うのはやめろ」

「鬼道くん！溶ける！アイス！溶ける！」

「だからって食ったらその後なにもなくなるぞ？」

「え・・・それは困りんぼだ！」

「ぴぴー。変な日本語レッドカード。退場！」

「退場したくない！」

「では、これから対策を考えよう」

「おう！」

けいかくていでん

というやつで停電になるようです。

「まず、氷を作る」

「停電までに作れる？」

「まず、やれ！」

「はいっ！」

「クーラーボックス！」

「はいはい。てか、私使われてる？今、サッカーじゃないから。君、司令塔やんないで？」

「黙れ！」

「ひどい・・・っ」

「次はヘルメットだ」

「はい。鬼道のね」

鬼道には黄色いヘルメットを・・・

「なんか、重いよね？道具装備しすぎ。ルール違反だね」

「ルール？」

「ゲームではそんなに装備できません」

「ゲームじゃないからセーフだ」

旬ネタ。・・・つまり、地震。／ギャグ／鬼道（後書き）

停電・・・。
携帯使えるからまだいいけど、、、。

よかったら、活動報告見てくださいなっ！

イナズマについて語ったりしてます。

主人公設定Ｇ２！！！（前書き）

色々変更した部分が・・・。

主人公設定Ｇ２！！！

藍原　四季（しず）

雷門中２年。

出席番号１番。

”あ”の次に”い”は結構な確率で１番になるのだが・・・。

円堂と同じクラス。ちなみに風丸は隣のクラス。

今まで言わなかったが、風丸の幼なじみ。

「うわぁ。突然の設定にビックリ！」

相変わらず運動神経がない。

頭脳はないが鬼道と対立している姿が目撃される。

ツッコミ、ボケ、どちらでもばっちこーい！

最近、佐久間の鬼道好きがハンパないと思ってる。

熱血くんはちょいと苦手なため円堂とあまりつるまない。

豪炎寺のお父さんにはいつもお世話になって・・・。

サッカーの知識が結構ついてきた。

ＦＦＩが終わることがことが恐ろしい。

マネージャーの仕事をしたことがあるのか、自分でも謎。

「ＦＦＩが終わるぅぅぅうう！？いろんな意味でどうしようっ！」

主人公設定Ｇ２！！！（後書き）

円堂編が・・・円堂編が・・・

アフロディが韓国人だったことにいまさらながら驚いておりますっ！

第２期が見終わった。

６５話の初め。アフロディがジャパンユニホームを着ていらっしゃる！！！！！

このまま日本人という設定にしてほしかった。

だが、

アフロディ、ガゼル、バーン

のカオスブレイク組はまさに神の領域。

かわいすぎるっ！

登校時間が短すぎますッ！／ギャグ甘？／風丸他

「風丸。この人誰？」

今、私の目の前には誰かがいます。

「誰って言われても・・・」

「風丸一郎太！俺と勝負しろ！」

目の前の奴はこの一点張りです。

「えっと・・・・・風丸！早く思い出せ！」

「ちょっと待って、ここまで名前がきてるんだけど・・・顔はでてる。顔は」

顔はそうだろう。だって今目の前にいるんだから。

「うーん」

「ねぇ、君も名乗ってらどうなの？」

「お前に名乗る名前はないっ！」

なんだコイツーっ！

てか、風丸好きな人ならわかる。最初から見ていれば。

「あーっ！」

「お！きたか」

「きれがくれ？」

「惜しいが違うっ！なぜそこまでわかっていてわからない！？」

「きらぃがくれ？」

「風丸一朗太！お前は俺をバカにしているのだな！？」

「あー、うるさい」

まぁ、正解は霧隠才次とかなんとか。

略しちゃっていいよね？

いいよね！

「風丸一朗太！雷門中まで勝負だ！」

「いいけど。霧隠だっけ？学校違うだろ？」

「そんなのどうでもいいこと」

「いいならいいけど」

「えー。私、一人で学校行かなきゃじゃん。その勝負パス」

「戦うのはおまえじゃなーいっ！」

「あ、でも確かに今日はシーズンと学校行きたいかも」

「ごめん。きらぃがくれ。私の一朗太は幼なじみ思いなの」

とか言ってみる。

「その心は繋がってます。みたいなふりやめろぉっ！」

「いやはや、長く幼なじみやってるとわかってきちゃうから大変だぁ」

「あはは・・・シーズン・・・」

「とにかく戦うのだ！さぁ、風丸一朗太をこちらに渡してもらおう」

「嫌だ！今日は私が先だったし」

「なにぃ！？」

幼なじみとして負けられない戦いがここにある。

「いや・・・二人とも・・・早く学校行かないと遅れる・・・」

「風丸さぁん！おはようございますっ。どうしたんですか？」

「宮坂、おはよう。いや、二人が・・・」

「風丸さん！喧嘩するほど仲がいい。ですよ！」

「え？そういうもんか？」

「はい！一緒に学校行きましょう！」

「あ・・・あぁ」

もちろん。遅刻しました。

同時刻。ある学校のK君も遅刻。

忍術でも瞬間移動はできません。

登校時間が短すぎますッ！／ギャグ甘？／風丸他（後書き）

イナズマＧＯの蘭丸くんがかわいいと思います。

ていうか、女の子疑惑って・・・もっと女の子っぽい子いましたよね！？

アフロディとか佐久間とか風丸とか宮坂とか！！！

風丸と佐久間はともかく、アフロディと宮坂は疑ってましたよ？

いや、マジで。

あ、イナズマ最終回は４月２０日らしいです。

最終話は、円堂たちが３年になってて卒業式だそうですよ。

そ、卒業式！？

まさかの同じ年ですか？！

しかも次は１０年後ですか・・・どんだけ抜かすんですかｗｗ

当り引かせろおぉぉぉおお！／ギャグ／鬼道（前書き）

結構大きい地震を感じながら書きました。

うへぇ…恐い。

当り引かせろおぉぉぉおお！／ギャグ／鬼道

「ほら。シーズンの番だぞ」

「んー・・・これ！

またジョーカーだっ！！！！！！」

トランプばば抜き２０回目。

また鬼道に引っかかった・・・！！！

なんだコイツーっ！！！

むかつくぞ！２０回も負けてる。

「いやぃ！！そのポーカーフェイスやめい！！！」

鬼道が私の考えをよんでポーカーフェイス。

確実に引っかかる。

ジョーカーよ。
なぜ・・・！なぜ・・・！

「これが作戦だ。しょうがあるまい」

「ギャンブル勝てん！ポーカーフェイスとか。とかーっ！！！！！」

「ははは。単純で可愛らしいぞ。シーズン」

「血が頭に上って噴火しそうです」

「だが、こんなにも引っかかる奴もいないな」

「本当に殴り飛ばしたいです」

「やめろ」

「ジョーカーしかこない」

「引っかかるからな」

「鬼道ってＩＱいくつ？」

「さぁ？未知数だ」

「バカにしてんのか！てめーっ！」

「ははは」

「どや顔やめろ。むかつく。あ、わかった！そのゴーグルで考えが見えるんだろう。３Ｄの時代はすごい」

「お？じゃあ、シーズンもゴーグルすればいいんじゃないのか？」

「あっ、そうか・・・って！！絶対親が見ちゃいけませんって言う格好は嫌だよ！！！！！」

「なんだ。それは。褒め言葉か？」

「へいへい。どうぞご自由に解釈してください。それはそうと鬼道」

「なんだ？」

「もう一勝負」

「飽きない奴だな」

「勝つまで引き下がらないよ」

「ふっ。一生無理だな」

当り引かせろおぉぉぉおお！／ギャグ／鬼道（後書き）

キャラソン死にました。

イケメンすぎます。風丸くん。

ヒロトもよかった。

もうすぐで終わりですね。

悲しいよぉ。

最近サボり気味なのでリクエストとかしてくれますと
早く更新できるかなーと思います。

活動報告のコメントなどで語りあいたいものです。

気軽におねがいします！

お詫びの会／反省／風丸（前書き）

訂正がたまってきたので書いてみましたー。

お詫びの会／反省／風丸

「いままでいっぱい小説を投稿してきたが、詫びないと・・・・ってことで！集まりましたー」

「なんだ？」

「風丸！まず、詫びろ！」

「なにを！？」

「一郎太の郎を朗と間違えた」

「シーズンは指摘されるのが嫌だもんな」

「うん。さすが幼なじみ」

「だが、俺が謝ることじゃない」

「侍かっ」

「どこを見てそう思った？」

「なんとなく。読めねぇ・・・は可愛かったよね！風丸！」
「なんだか恥ずかしいぞ！？」
「もう言わないから詫びて？」
「・・・しょうがない。えっと…名前間違えられてすみませんでした」
「よし！次だ！次！」
「気になったのは佐久間にメガネってとこだな」
「うんっ！思いっきり間違えやしたっ！」
「眼帯にメガネって重いだろ。重い」
「わかってる。だから、風丸詫びて？」
「また俺か！！！」
「さーん。にー。いーち」
「はいはい。わかったよ。重いことしてすみませんでした…」
「ありがとー風丸！
あと、円堂と会話する機会が少なくてすみません！
鬼道ネタが多いよっ！って心の中で皆さんがツッコんでいることは知ってます。

えっと…あとは…読んでいる人に感謝感激ですっ！

え？読んでる人なんていないって！？

いますよ！あなたじゃないですか！

こんなくだらない物語におつきあいいただきありがとうございますっ！」

「シーズン。全部言ったか？」

「うん！言った！これからもがんばります！」

お詫びの会／反省／風丸（後書き）

間違いも私の小説の味なので直したりはしません。

どこからでもと言っておきながらどこでもじゃねーかとか言わないでくださいねっ！

アイデアもなくて暇だー／ギャグ／鬼道（前書き）

小説のアイデアが出なくて

「暇だなー」

と考えて書きました。

アイデアもなくて暇だー／ギャグ／鬼道

「暇だー…。なにも考えが思いつかん。だれかだれか助けて…」

「そこでだ！シーズン！」

「うおっ！！鬼道。いきなり出てくるな」

ゴーグルマント…改め鬼道がどこからともなく出てきた。

「お前にリクエストする奴なんてせいぜい風丸くらいなもんだ」

「風丸からもされてないしな」

「そこで！」

「話戻しまーす」

「この曲を聴け」

「突然ヘッドホン！！！過去の鬼道、トゥントゥクを思い出します」

「トゥントゥクトゥントゥク」

「うわ☆聞きたくないっ☆」

「まぁそれはいい。ほれ」

「暇つぶしにはなるかな」

ヘッドホンそうちゃーく。

「ん…こ、これは！」

「そうだ」

せーの！

「「モヒカンを駆け抜ける風が冷たくてもな（（どやっ」」

キャラソンでした。

アイデアもなくて暇だー／ギャグ／鬼道（後書き）

まさかの続くかもです。

キャラソンいいです☆

暇なときの様子シリーズ１／ギャグ／不動・鬼道（前書き）

暇なときシリーズになりました。
気長に頑張ります。

感想とかありがとうございます！

感謝感激です！

暇なときの様子シリーズ１／ギャグ／不動・鬼道

「おいコラ。ふざけてるのかテメー」

「嫌だなぁ…不動くん。ふざけてるだなんて。私はただ純粋にキャラソンを楽しんでただk…」

「その通りだ！不動！」

不動に言い寄られてます。あはっ☆

「俺を馬鹿にしてなにがなにが…！」

「孤独でいいのさっ☆」

「ふざけんな！」

「うおぉぉいっ！殴ろうとすんな！顔はアウトだ！」

パンチをギリギリで避けた。あっぶねぇ…。

「そうだ！鬼道のも聴いてみよう！そうすればお互い様だ」

「まぁ」

「じゃあ鬼道。音楽プレイヤーを渡してもらおうか」

「ここで残念なお知らせだ。俺の音楽ｐｌａｙヤーには一曲しか入っていない」

・・・？！

「もったいねぇ！！！そしてなぜ英語か！？」

「キャラソンってアルバムじゃねぇか。何故一曲なんだよ！てめぇ！」

「俺は１プレイヤーに一曲しか入れん！」

「めんどくせーっ！！！」

「どや顔がうざいな」

「うん。不動。同感だ。イエーイ！」

無理やりハイタッチしてみた。

うんっ☆ノリ悪いっ☆

「じゃあ次回は誰かにプレイヤーを借りに行こうか」

「まだ続くのかよ?!」

暇なときの様子シリーズ１／ギャグ／不動・鬼道（後書き）

イナイレも新シリーズになったので新しい小説書き始めようかな…。

タイトルはもちろん『稲妻イレブンＧＯ！』になります。

どうしましょう…？どうしたらいいですかね？

コメントお待ちしています！

私に照美様のお導きを！

カノンが誰かを連れてきました。／ギャグ／カノン・天馬（前書き）

はい！リクエストです！

天馬くんを出すにはどうすればいいか迷っていたところ都合のいいのがいるじゃないか！！！

ってことで。カノンです。

ですがカノンのインパクトが強すぎて天馬が薄れたな。うん。

カノンが誰かを連れてきました。／ギャグ／カノン・天馬

「こんにちはー！シーズンさん！」

「うんっ☆もう驚かないよ☆いらっしゃい」

「少しは驚いてくれないと未来人として困りますよ☆」

カノンくんが当たり前のように未来からやってきた。

この際、驚かないよ。

だっていつも超次元ワザ見てるし。

「で？今日はなにかな？」

「シーズンさん。シーズンさんは１０年後何してると思います？」

「軽く無視したね！お姉さんは悲しいよ！」

「こっちの時代ではおばあさんですよ☆」

「うわぁっ☆失礼なガキっ☆」

「ガキはやめてくださいっ。きっとシーズンさんより頭いいですよ」

「くやしくない。くやしくないよ」

「話戻しますが、１０年後ですよ！」

「１０年後ー？えーと。２４歳か」

「よくできましたー」

「そろそろその生意気キャラやめようか？誰かさんとカブってるか

ら」

「実はですね？シーズンさん！今日は特別に１０年後の雷門中学生を連れてきたんですよ！」

「うわぁ。人を待たせるなー」

「ではでは。天馬くーん」

「一応そっちが年上だろ！？な！カノン！」

「こんにちはーっ！なんとかなるさ！でおなじみの松風天馬ですよーっ！」

「・・・・・・えぇ…誰が仕向けました？そしてなぜクローゼットから出てきたりする！？驚くよ！？さすがに！」

「そういうところは明確にしといたほうがいいですよっ☆」

「・・・で？君は松なんとか…」

「えっ？一人しかいないのに松しか覚えられなかったんですか！？！？！？」

「いやはや、クローゼットから人のインパクトが強くて…」

「いいですか？マツカゼテンマです。ＯＫデスカ？」

「カ・タ・カ・ナ！！！！！ひらがなに直して！！！！！」

「ってことでイナズマイレブンＧＯ！略してイナゴは放送中です。気合入れてみましょうねっ☆」

「イナゴ…？あぁ、トンボの」

「はい。トンボは出てきませんね」

「あ・・・はい。なんかすみません」

「おぉ！やばいっ！未来人は５分しか過去にいられないんだった！！！」

「うん。どこかのヒーローセリフありがとう」

「ではっ！シーズンさん。８０年後に会いましょうね」

「帰れ帰れ」

「１０年後に会いましょうね！」

「うん。雷門中避けて通るよ」

と言って二人は帰って行った。

・・・クローゼットから。

「やっぱりクローゼットからなんだな」

・・・未来って面倒くさい。大人になりたくないな。

カノンが誰かを連れてきました。／ギャグ／カノン・天馬（後書き）

天馬の出番はカノンが持っていってしまったねっ☆

一人何回でもリクエストＯＫなのでどんどんお願いします。

頑張ります。

でもこのクオリティでいい方のみ大歓迎とします。

うわー。マジで似てるね。／ギャグ／不動・南沢／１０年後設定（前書き）

待たせてごめんなさいっ！

リクエストでぃず！

名前も借りちゃいました！
素敵な名前なのに…スミマセン！

設定としては中２でマネジです。

キャラがまんまシーズンな気が…。

南沢さん頑張って書いたが、最後放置しちゃったなって。
不動さん、ふさお設定っ！ふさおは絶対カッコいいでしょう！

ではでは。こんな駄文でも許せる照美さまはどうぞです。

うわー。マジで似てるね。／ギャグ／不動・南沢／１０年後設定

「先輩センパイ！！！」

「ん…どうした？南央」

「大変なんですが、ひとまず、シャツを着てください。上半身裸だと女子が倒れます」

「部室にノックもせず堂々と入ってくるお前も凄いけどな」

とりあえず南沢先輩にシャツを着させ、部室から出した。

「大変だ。大変だ」

「だから、何が大変なワケ？」

「実はですね…なんと！」

「おぉ…」

「見てからのお楽しみです！」

「おい。先輩からかうのもいい加減に…」

「ほら、あれ」

「・・・」

「先輩に似てませんか？」

私は学校で見かけたお客様っぽくないけど学校では見たことがない一人の男の人を指差した。

「で？俺はなんて反応したらいいわけ？」

「ベリベリ似てるじゃんっ！ナイスジャン南央！って言ってくれたら嬉しいです」

「無視することにした」

「ちょっと！先輩！どこ行くんですか！！！」

どこかに行こうとする南沢先輩の腕をつかんだ。

「離せ…」

「声かけてみましょうよ！リアル南沢さんに！」

「おぅ…言っておくが、こっちがリアルだ。わかるか？」

「了解した！じゃあ行きましょう！」

「え？微妙にため口…」

☆

「あのぉ…」

「ん？誰だ？てめぇ」

「うわぁ…口悪い…先輩そっくり…」

「なにか言ったか？南央」

「全くっ☆」

先輩恐い…

「ところであなたは…誰で？」

「そっちから話しかけてきたのに失礼な奴だな」

「神聖な雷門中に先輩のようなタイプは一人で十分だ！！！」

「なんの告白だよ…」

「南央、それどういう意味？」

「声も似ている気が…」

「「気のせいだ！！！」」

「え。先輩息ピッタリじゃないですか」

「いや、似てないぞ？あぁ！あんなところに昔のイナズマジャパンの写真がぁ…」

「本当だ！すっごい偶然！きっと先生が落として行ったんだー」

「さっきからお前らのそのチームワーク何なんだよ。てか、片言だよ。棒読みしすぎだろ」

「・・・Ｏｈ…不動さん昔はモヒカンだったんですか？」

「…嫌な過去を掘り出された。そして、俺が不動ってことがなぜわかった？！」

「嫌だなー。超次元ですよ」

「なんか嫌な時代だ」

「俺をほっておくな」

「おー南沢センパイいたんですか？」

「冗談はそこまでにしろよ？」

「平謝りします。
ところで不動さんの髪はどうやってそんなにのばしたんですかね？
まずハゲですか？
全部剃らないときっと均等にはなりません・・・あ、私はマネージャーの仕事が…先輩。後はよろしくお願いします」

不動さんがメッチャ恐かった。

はは…後で春奈先生に聞こう。うん

うわー。マジで似てるね。／ギャグ／不動・南沢／１０年後設定（後書き）

まとまらなかった。うん。

つまらなかったな。

南央さん！こんなのですみません！

風丸に土下座させます（（汗っ。

これからも是非仲良くしてくださいねっ。

イナゴにもオリキャラが必要でしょ？主人公設定！！（前書き）

2代目！

さぁ、GOも進んできたところで新しい主人公設定です！

マネージャーが色つながりってことで今回は…

イナゴにもオリキャラが必要でしょ？主人公設定！！

藍波（あいなみ）　紫空（しく）

中2

出席番号1番

1年の時からサッカー部のマネジ。

性格はまんまシーズン。

だが、ちょっと女らしいかも。

金欠？当たり前じゃないですか！

みんなからの呼び方は様々。（（使い分けるのめんどい

1年はソラ先輩

2年はソラ

3年はシク

蘭丸と小2からの付き合い。

蘭丸を通して神拓とも仲良し。

シーズンと従妹だったりするかもしれない。

「名前多くて反応しないかもねっ☆よーし！みんなに奢らせるよーっ！ちょっと！センパーイ！」

イナゴにもオリキャラが必要でしょ？主人公設定！！（後書き）

これでＧＯのリクエストも受付けられます！

蘭丸さんが大好きです！

まだキャラの性格がわからない…。

一輪車は難しい・・・おい！そこっ！／ギャグ／虎丸（前書き）

今までほったらかしになっていたモノを復活させてみた。

めざせ！途中作品ゼロ！！

一輪車は難しい・・・おい！そこっ！／ギャグ／虎丸

「う・・・うわぁぁ！！！」

「シーズンさん何やってるんですか？」

「ご覧の通り一輪車です」

一輪車に壁がないと乗れない妹をからかっていたら「お前がやってみろっ！」と言われてしまい、練習中。

で、偶然通りかかった小学生・宇都宮虎丸に会いました。

「大変ですね。では、また」

「ちょいちょい！待ちなさいっ！」

「なんですかぁ・・・？」

虎丸も嫌な予感がしているらしい。

「君もやらない？」

「やりませんっ！」

即答された。
先輩なのだからちょっとは迷ってほしい。

「虎丸くーん！」

「お願いですから。僕には会わなかったことにして下さい」

「よし。乗ってくれたら考えてあげよう」

「嘘ですよね？顔にかいてあります」

「なに！？」

ちょっと酷い・・・この天才小学生は・・・！！！！！

「そうだ！豪炎寺もやってた」

「えぇ・・・！？豪炎寺さんが！？ちょっと・・・可愛らしいじゃないですか！！！」

「そうだ可愛らしかった」

「って！嘘でしょう！誘惑しないでくださいよっ！」

「な・・・なぜバレた！？他の奴なら完全にだませるのに！」

「皆さん単純で・・・」

「さぁ、さっさと乗った乗った」

「うえぇ！？マジで巻き込まれたくないんですっ」

「まぁまぁ。このタイヤが一つついていて、サドルとペダル。そしてユラユラと揺れる物に乗りたまえよ。君」

「完璧に一輪車じゃないですか！！！！！」

「細かいこと言ってないで」

「しつこいですね・・・わかりました。挑戦しますよ・・・」

「で、やったことは？」

「あるわけないです。一輪車なんて買うお金ないですし、別にほしくもないですから」

「ま、私もこれ乗らなくても生きていけるからね」

「じゃあ、いいじゃないですか・・・うわぁっ」

「大丈夫？」

「行きますよ・・・？」

「え？もう足離せたの？はやっ」

私なんて足も離せないから・・・

「早く帰りたいんです・・・よっ」
「すげー…誰だよ。この子に才能という名の素晴らしいものを与えたのは」

「はい。これでいいですよね！はい。返します」

「あぁ。どうも」

「では、また明日！シーズンさん。さようなら」

「うん。バイバイ」

あの小学生。笑顔で去って行ったよ。

なんなんだ。この言い返せない感は。

「…もういいか」

一輪車あきらめた。

きっとできなくても人生バラ色さ。

とか開き直ってみた。

「…豪炎寺にやらせてみようかな？」

一輪車は難しい・・・おい！そこっ！／ギャグ／虎丸（後書き）

虎丸のキャラが…。

面白くもないのにギャグとか。

これでも頑張ってるんです！

マジカルバナナしようぜ！／ギャグ／色々（前書き）

やっと更新できました。

8月1日の時点でこの小説をお気に入り登録してくれてる人が6人！

マジで感謝！

ですっ！

マジカルバナナしようぜ！／ギャグ／色々

「イナジャパ恒例マジカルバナナパス練だっ！」

「・・・」

「ふっ・・・」

「・・・」

「今年もこの時期が来たか」

「・・・」

「1年長かったね」

「・・・」

「今年は優勝だ！！」

「まてやぁい！！！！！」

今日は私を差し置きみんなが盛り上がっていた。

「な、な、なんだ！？ソレっ！」

「なんとっ！？シーズンは知らないのか！？」

「鬼道。おい。誰が知ってるって？コレ読んでる人誰も知らないから」

「マジカルバナナー」

「人の話を聞こうか。キャプテン」

「バナナと言ったら不動ー！

ちなみに不動の次についてるのは壱じゃなくて伸ばし棒だよ。”のばしぼう”って打ったら”ノバ志望”って変換されたことにビックリだよ！」

そういいながら円堂がゴールのところから高くボールを投げた。

「丁寧な解説ありがとう。そしてツッコミしきれないな」

「シーズン。これは超次元だ。きらーん」

「うん。きらーんは無視するよ」

高らかに上がったボールを吹雪が足に吸い付いてるように見事にとった。

「シーズンちゃん！小型掃除機って知ってるかい？」

「ごほん。レッドカード退場」

「えぇ！？まだ何にも言ってないもんっ。えっと…不動くんと言ったらＭＦ！」

吹雪がヒロトにパスを出した。

「え……そこ、モヒカンじゃないの？」

「ＭＦだよ」

「吹雪ー。退場だよー」

「え？今日の審判シーズンちゃんなの？」

吹雪除く全員「そうだ」

「うそっ……最悪」

「吹雪。ボケたらイエローカードにしてやるよ」
「なに？突然シーズンちゃんからの上から目線」
「今日はなぜか審判だから」
「・・・いいや。退場で」
（キャラ守りやがった）

みんなの気持ちが一つになった。

「じゃあ、ヒロトからね」
「はいはい。えっと…ＭＦといえば」
（さぁ、ヒロト。ボケろ）

なぜかみんなでボケを狙っている状況。

「あっ……メッチャ（Ｍ）　不動（Ｆ）」
「ヒロト合格」
「おい。なんでさっきから俺ばっかなんだよ？」

「え？マジカルバナナって不動に関連する言葉を言えば……」

「よくねぇよ！」

「え？マジ？」

「マジd…」

「みんな！サッカーやろうぜ！」

「後半か中間に続くよ！吹雪だよっ☆」

マジカルバナナしようぜ！／ギャグ／色々（後書き）

まだ内容は考えていませんが、後半に中間に続いてしまうかもしれません。

ギャグセンスほしいです。

２０話ですかね？この話が。うわぁ。

折り返し地点というかなんというか。

感謝の会でも設立しましょうかねｗ

部活でカラオケっ！／ギャグ／色々ＧＯ（前書き）

紫空ちゃん初登場です！

呼び方が面倒くさかったのでみんな”シク”にしましたー。

変更。変更。

で、この話はいつまでも蘭丸には男前でいてほしい。

という人はグッドバイしてください。

「いやーっもぅ！」

「なんだ？」

私が一人で重いものを運んでるのを無視する部活の奴ら。

「……大丈夫か？」

後ろから拓人がやって来た。

「ありがとう。拓人！」

「神童、手伝わなくていい」

「蘭丸の鬼っ！」

「重っ……」

私の持っていたモノを拓人が持って、呟いた。

「拓人、そこのテレビの下に置いて」

「う、うん」

「神童、手伝うぞ？」

蘭丸が半分持った。

「蘭丸くん？殴られたいのかな？」

「神童、ほら。ヨイショ」

無視された。

息を合わせて箱状の荷物を置く。

「こんにちはー……って先輩何してるんですか？それ、何です？」

松風と西園がやって来た。

「監督の変な特訓Ｖ２」

「次は何ですか？」

「みんなで息を合わせるためにまずは声を鍛えないとってことでカラオケ♪」

「カラオケ！」

「カラオケ！？」

「カラオケ……？」

上から松風、蘭丸、拓人の順。

「うん。まずは松風。嬉しい？」

「はい！皆さんの歌、聴きたいです！」

「僕もー！」

無邪気な1年。普通の反応。

「じゃ、次、蘭丸。意外か？」

「いや、スッゲー嬉しい。カラオケ……まじ久しぶり」

実はカラオケ大好きな蘭丸。だが、好きなだけじゃ終わらないのが蘭丸。

「で、拓人？カラオケ知らないの？」

「か、カラオケ？」

「マジか。えっと……カラオケは……ググれ！」

「ちょっと調べてくる！」

拓人がダッシュで部室を出ていった。

箱入りボーイの拓人。庶民のことは知りません。

「カラオケすんの？」

「南沢先輩！南沢先輩の十八番は何ですか？」

「そんなの……こんなところで言えるかよ」

意味ありげな南沢先輩。これ以上、この話には触れない。

倉間が腕を引っ張った。

「カラオケ……マジで言ってんの？」

「まぁね」

ヒソヒソ声。

「霧野がどうなるか知ってて？」

「……ゴメン。慣れて」

蘭丸と私とカラオケ行ったことのある倉間には先に詫びとく。

「アイツ、普通に上手いけどな……」

「わかるよ。倉間」

倉間の肩を叩いた。

「ではでは。ググりに行った拓人はいないけど始めますか」

「待って！シク！」

「おぉ。お帰り。拓人」

「カラオケとは歌の伴奏だけを録音・再生する装置。また、それに合わせて歌うこと。なんだな！」

拓人が辞書で調べたような解説を述べた。

「そうかも。うん。じゃあ、始めるか」

では。カラオケ大会開始。

「まずは……」

「はい！俺歌う！」

「蘭丸の他には？」

全「……」

「お、おい！倉間！」

「無理！」

「松風は！？」

「聴きたいです」

「じゃあ、俺だな」

蘭丸が立ち上がった。

「待って！えっと先輩は？」

「初めはな……」

「これは特訓です！」

「だから、俺が歌ってやるよ。3曲くらい」

「ダメ！」

「おい。シク、さっきからなんだよ？」

「霧野に歌ってもらえばいいんじゃないか？」

「……三国先輩まで」

「もうダメだ。倉間。諦めよう」

「あぁ」

「蘭丸。いいよ。歌って。私は知らない」

「俺も知らん」

「なんなんだよ？変な奴だな？」

蘭丸がカラオケに曲を入力した。

先に言っておく。

蘭丸の十八番はテンション高すぎてみんながついていけないのだ。

まる。

蘭丸の十八番。

『ドンマイ　ドンマイ！』

歌っているのは小林さん。

ごほんっ。

前奏が始まり私と倉間は耳をふさぐ。

蘭丸が息を吸う。

歌の始まり。

「♪今だ体は……大好物はロリにメガネお姉さまに……」

テンション高いのに先輩たちが、ついていけない。

「だから嫌なんだ。だって、これ、蘭丸そのもの……特に最初」

倉間と後ろを向きながらヒソヒソ声で話す。

「あの、”美しさならピカイチ”ってとこだろ？あと、”勘違いして取り巻き共わいてる”ってとこが……」

「”コスプレしたらピカイチ”もね」

「帰りてぇ」

「こっちが恥ずかしい」

「いや、ここは前向きに考えよう。ここでみんなが霧野の曲に引いたら、さすがにもぅ、一番目には歌わないだろ」

「なるほど」

倉間とハイタッチした。

「うなばらあぁあぁぁ！」

蘭丸が熱唱し終わった。

「……霧野」

「どうした？神童」

「この曲なんだ？今まで聴いたことない……」

拓人が突然、泣き出した。

「ちょっ！？神童！？」

「……

……感動した」

「「マジかよ」」

「先輩。カッコいいです」

おい、一年。
なに目を輝かせてるんだよ。
憧れの目、止めろ。

「そうか？じゃあ、２曲目もいくぞーっ！」

「頑張ってください！先輩」

「おぅ！」

それから蘭丸は

『ＨＡＮＡＪＩ』
『君に、胸キュン。』
『るんるんりる　らんらんらら』
『どうにもとまらない』

を歌い上げ、残っているのは私と倉間、松風、西園、拓人だけになった。

「「いい加減、気づけよ」」

部活でカラオケっ！／ギャグ／色々ＧＯ（後書き）

はい。小林ゆうさんが大好きです。

三次元の中で一番好きです（（キリッ

マジカルばななー♪／ギャグ／色々（前書き）

はい。マジカルバナナ2回目です。

流れ的に不動をいじります。

マジカルバナナしてません（（キリッ

マジカルばななー♪／ギャグ／色々

「ねぇーねぇー。不動」

「なんだよ？」

「イナイレ好きでマジカルバナナして不動が無限ループは当たり前だってよ」

「おぅおぅ。どこ情報だ？」

「インターネットで絵がいっぱい載ってるサイトだよ」

「あぁ…。なんかわかるぞ」

「シーズン！そんなことよりサッカーしようぜ！」

そんなこんなで後半戦スタート。

「マジカルバナナーっ！」

「まてぇいい！！！」

「なんだよ？シーズン？ゴールキーパーするのか？」

「しない。したくない。違うよ。またマジカルバナナから始まると……」

「おい。てめぇ。なに見てんだよ」

「嫌だな。不動クン。君のためにｗｗ言ってるんじゃｗｗｗないかｗｗｗ」

「てめぇ。笑ってるじゃねぇか」

「笑ってるなんてｗｗｗそんなｗｗｗ」

「それでよく笑ってないと言えるな！？」

「不動退場ｗｗｗ」

「理不尽だっ！」

「じゃあ、”不動”はなしな」

円堂が革命的なことを考えた。

「じゃあ、不動……ベンチｗｗｗ」

「ハメてるな。恐いな。最近は」

「ベンチ温めｔ…「コイツどうしたらクビにできるか大募集中」勝手に募集するなっ！」

「みんなー。おにぎりできたよー？」

秋ちゃんが大量のおにぎりを持ってきた。

「よし。休憩だな」

「では休憩入りまーす」

マジカルばななー♪／ギャグ／色々（後書き）

いつまで続くこのシリーズ。

もうよくわからなくなりました。

よし！終わらせるぞ！

私は几帳面なＢ型でｓ（（

投稿時点でお気に入り登録してくれた人が９人！！！

好きなキャラ言ってくれたら暇人だから書くのに……。

何より、読んでくれてありがとうございますっ！

暇なときシリーズ２／ギャグ／不動（前書き）

暇だったので始まったこのシリーズ。

果たして終わりは…

今回初めて描写なしです。

えへへっ

暇なときシリーズ２／ギャグ／不動

「えーと。前回のあらすじー…以下省略！」

「適当だなっ！おいっ！」

「暇なときシリーズは自由度無限大だっ！そこらへんのＲＰＧより自由度高いぞ！」

「おぉ…わからない比較だ」

「で、君は…」

「不動だっ！」

「おぉ！フドウくんっ！私たちは、鬼道に別れを告げ、音楽プレイヤーを探す旅に出たのであった」

「そうですか。てか、この話の目的はなんだ？」

「特にはありませんが、なにか問題でも？」

「終わりはないのか」

「ない」

「おぉ…言い切りやがった。でも、俺のターンはこれでおわりだろ？」

「ワッつ？」

「だって、1人二回出りゃあいいんだろ？鬼道だって二回だったし」

「おぉ！気が付かんかった！！！」

「なにぃっ！？あぶねぇ。また出させられるところだったぜ」

「・・・ま、そんなの決めてないから出したい人を適当に選ぶだけなんだけど」

「なにか言ったか？」

「べっつに？」

「音楽プレイヤー探しに行こうぜ！」

「おお！悪さにかける不動」

「なにか？」

「なにも言ってねぇよっ☆」

☆

「なぁーなぁー不動」

「なんだ？」

「お前の１０年後ってニートなんだぜ？」

「おまっ、将来不安になるようなこと言ってんじゃねぇーよ！なんで中２にして、１０年後がニートだって知らせられなきゃいけねぇんだよ」

「いや、だってｗｗｗ」

「だってじゃねぇーよ！」

「いやぁー、こわいー」

「棒読みだよ！めんどうくせぇな！お前っ！」

「おい。これはこれはいいところに」

「描写しようや！だってお前、この話、会話しかねぇじゃねぇーか！誰だよ！誰が来たんだよ！」

「……不動」

「俺か！！俺か！！！」

「大切なことは2回ね」

「もう疲れた。お前といると疲れる」

「私、一応ツッコミなんだけど……」

「誰がツッコミだって！？あァ！？」

「よく言えば半田と同じバランス型！」

「悪く言えば中途半田」

「おぅ！……あ、ごめん。ここで半田の流れだけど半田を言葉だけでは説明できないほど特徴がないので登場させないよっ☆」

「おいおい。うぜぇな」

「だから次も不動よろしく！」

「……しかも俺ら全然進んでねぇし」

「音楽プレイヤーはどこにあるぅ～♪」

「あーあーなんにも聞こえない」

暇なときシリーズ２／ギャグ／不動（後書き）

不動ってツッコミですよね。

終わりが中途半田だったな。

最近、イナゴが面白すぎて……

蘭丸！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0762p/

稲妻イレブン

2011年10月6日17時14分発行